大正元年十月一日第三種郵便物認可　大正元年十月一日發行(毎月一日發行)

近代思想

十月號

■愚かなるものよ…(詩)……飄風…(一)
■本能と創造…(評論)……大杉榮…(三)
■本當に騙されてゐる男(對話)……伊庭幸…(六)
■新しい戲作者…(感想)……山本飼山…(一〇)
■大杉と荒畑…(人物)……堺利彦…(一三)
■ラファルグの認識論…(研究)……小原愼三…(一四)
■怠惰者…(小說)……荒畑寒村…(一六)
■近代劇論…(評論)……荒畑寒村…(二一)
■賣文雜話…(隨筆)……漁六…(二六)
■發刊事情……榮…(二七)
■九月の評論…(批評)……榮…(二八)
■九月の小說…(批評)……寒…(三〇)
■消息……記者…(三二)

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Library
AP 95 .J2 K4 no.
213-442254

▲若宮卯之助君著

豈辯を好まんや

（忽三版）

▲定價金六十錢▲郵税金六錢
▲四六版三百二十ページ

◉本書を發行せし理由！！！

僕は平生隠れたる人物を世間に紹介し、其議論によつて世間を益し度いと思つて居る。然しさう云ふ人物は滅多に無い。玉と思つたのが案外瓦であつたりする。所が、昨年友人の紹介で、本書の著者若宮卯之助氏に會ふや、忽ち其の人格、學問、識見に傾倒して了つた。氏の如きは、眞に學者振らざる學者、敬虔なる眞理の探求者、勇敢なる眞理の擁護者であつて、當代比肩者を見ざる眞人物である。そこで、僕は氏に懇請して、毎號吾が實業之世界に氏の卓說を掲ぐる事とした。これは讀者諸君の知らるゝ通りである。而して僕は、氏の議論が世間に稗益することが多大であることを信ずる餘り、氏が是迄日本新聞に掲げた諸種の問題に關する數十篇の論文を輯めて出版せんことを氏に計つた。氏は出版する程の事はないと謙遜されたが、僕は、遂に氏を口說き落して出版する事とした。本書は一小册子に過ぎないが、其含蓄する所は、最新の學理の基礎に立てられたる深奥なる思想の結晶であつて、實質は世の學者先生達の等身の著者にも優つて居る。其論議關涉する問題の廣い事も無類であるが、其れに對する批判の正確にして卓拔なるは、驚嘆に値ひする。文章は獨創的で、淸新である。實に本書の如きは、生きたる書籍である。僕は斷言する、現代の如き各種の複雜な問題が坌湧する時、此の著の如きは、最も信頼すべき思想上の羅針盤であると。

發行者　實業之世界社々長　野依秀一

發行所　東京芝露月町　實業之世界社　振替貯金口座三四三參

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY

東京魁新聞

▲發行所　東京市麹町區有樂町一丁目三番地

■東京魁新聞は月三回發行、毎號十二頁の大新聞で、然も一部金三錢、一ケ月金十錢、一ケ年金一圓といふ破レコード的低廉です。

□東京魁新聞は九月一日初めてその第一號を出したのみで、未だ新聞界の嬰兒に過ぎませんが、その**編輯法は日本の新聞界に一新紀元**を劃したものと云はれ、十二頁の大新聞紙、何處を繰つても一行としてソツが無い、ムダを見ないといふ評判です。

■東京魁新聞は旬日間の重要な出來事に、勤切精到なる批判評論を加へて報導する外、忌憚なき人物月旦、趣味多き演藝記事、破天荒の探偵小説、諸外國の最新事故、及び本紙獨特の大寫眞版を滿載します。殊に**政界の巨頭**

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

連が魂膽、詐欺會社やボロ銀行の秘密は、恰かもX光線で照した如く明かに映し出される處、他新聞に見られぬ特色です。

□東京魁新聞は副食物又は菓子の如く、家庭と稱する食卓に味ひを添へ、趣きを加ふるものです。日刊諸新聞は恰かも飯の如く、日常生活に無くてならぬ物ですが、飯のみで副食物の無い食卓は、到底人の堪ゆる處ではありません。且つ副食物又は菓子は、それ自身で時に飯の代用とさへなります。

■東京魁新聞の既刊號は悉く賣切れましたが、特別殘部が少しあります。

此際郵券一錢御送附の方には、見本として一部進呈します。

東京魁新聞

▲電話 本局一六八七

▲振替 二三一九六

詔勅（二十餘篇）■御宸筆■御傳記■御聖德
御製（約五百首）■御肖像■御年表■御逸話 謹輯

明治天皇御傳

先帝最近御尊影 コロタイプ版 新聞紙一頁大 附錄丸筒入莊嚴無比中澤弘光畫伯謹寫 大額面

傳家の寶典

著者大故に遇ふて恐懼に堪へず齋戒沐浴聖光を仰慕しつゝ執筆したる千古の名文也御誕生より御崩御後御大喪御準備御追號奉告祭に至る迄を謹記し奉り謹嚴にして通俗、平易にして雅馴なる何人にも奉讀せらるべき趣味横溢せる一大通俗明治史也家庭最上の讀物萬古傳家の寶典一讀人をして粛然襟を正さしむ本書が如何に國恩報盡の赤誠を披瀝せるかは曾て宮廷記者として令名あり日常心を皇室に潜むる著者の人格に於て千中唯一の良書として推薦するを躊躇せず本書出でゝ人皆此書著者其人を得たるを賞するの宜なりといふべし加ふるに卷頭に奉掲せる御製四百八十餘首は御秀歌を謹製せるものにして先帝陛下の御聖德を慕ひ奉るべく之れを家庭に三誦して以て一家の金箴たらしむべく卷頭の御詔勅集は御維新以來施藥救療の御勅語迄其重なるものを謹集し奉り卷終の御年表は嘉永五年より大正元年迄を收む若し夫れ卷首掲げまつりし御由緒ある御寫眞は尤も意を用ゐたるものにして大附錄としたる御最近御尊影は他と其撰を異にし書伯が齋戒多日にして漸くなりたる御影にしてこれをコロタイプ不變色版に印刷したれば家庭に奉掲して日夕撫育の皇恩を感謝し奉るべし希くば諸君一本を藏して永く家庭の寶典とし玉はんことを■御奉告祭以後は大葬盛觀に尤も詳か也■

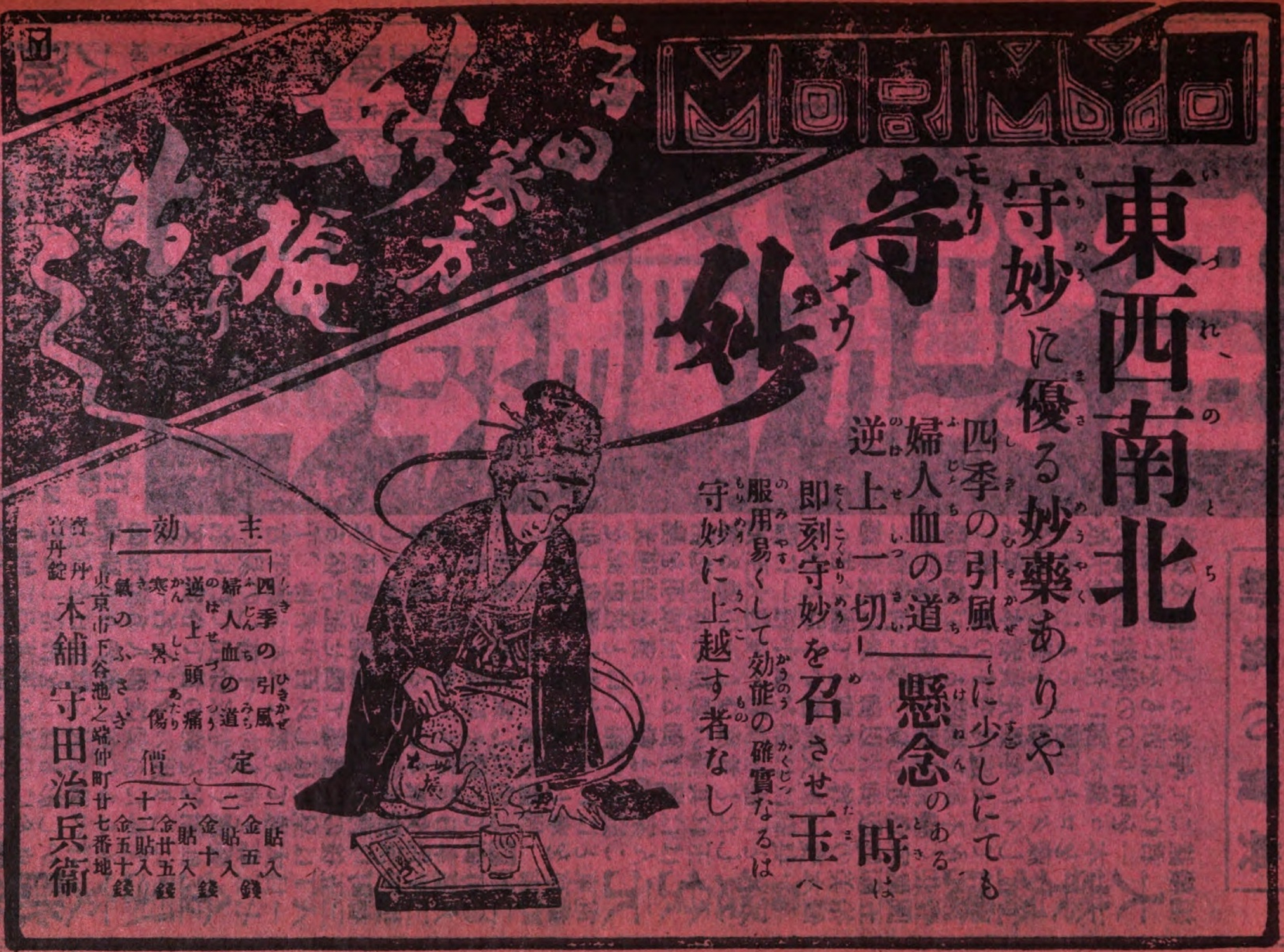
續編 **大葬盛觀** 莊嚴頗美本 壹圓五拾錢

■發兌元 東京市麹町區平河町五丁目五 電番町二〇九三 振替三八一七 **金尾文淵堂**

■[illegible]光[illegible]著紙數四百廿頁 特價壹圓五拾錢送料貳拾錢

御束帶御影 木版極彩色 吉川靈華寫 人元帥御影 コロタイプ 寫眞版光澤 紙揷廿四頁 五號活字總 かなつき讀 最平易菊判 鳥子紙極彩 色裝釘莊嚴 美麗箱入[illegible] 製正價貳圓

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN


東西南北
守妙に優る妙薬ありや
四季の引風に少しにても
婦人血の道「懸念のある時は
逆上一切」
即刻守妙を召させ玉へ
服用易くして効能の確實なるは
守妙に上越す者なし
守妙
主効
四季の引風
婦人血の道
逆上頭痛
寒暑傷
氣のふさぎ
定價
一貼入 金五錢
二貼入 金十錢
六貼入 金廿五錢
十二貼入 金五十錢
東京市下谷池之端仲町廿七番地
本舗 守田治兵衛

第一巻 第一號

愚かなるものよ

愚かなる。
太陽を捕へ、朝の日光を、
繩をもつて縛しめむとする。

風に乘り、あるはまた、
走る流れに逆らはむとする。
四季を阻みて、降る雨を止めむとする。

空氣と戰ふ心無さよ。
ありとある力を、畢に無にせむ。
かゝるに同しく、かゝる業より更に愚かなる。

人の言ふ所を咎め、そを强ひて教に違はさんとする。
定めを人の上に立て、
物言ふも、そを超へしめぬ。

さなり、人の口を塞かむこと。
吹く風を捕ふるよりも難きものを。
愚かなるものよ。

（飄 風）

本能と創造

大杉榮

温和なる專横

此頃坪内博士の『所謂新シイ女』を讀んだ。

老人は馬鹿で利口で利口で馬鹿であるとは、佛蘭西の皮肉家ロシユフオコールの言葉である。坪内博士は可なりに善く近代人の思想や感情を理解する事の出來る隨分利口な人である。けれどもさて之れを批評するとなると隨分愚にもつかぬ事を云ふ馬鹿な人である。

今僕は此書の紹介や批評を試みる積りはない。只此書の文を借りて平素僕等の抱いてゐる感想の一部分を現はにすれば足りる。

イブセンの『人形の家』のヘルマアが、先づ相應に立派な紳士で、其の利己本位の卑劣な性癖をノラに罵られて、直に其れによつて反省して將來は心を改めやうと云つてゐるのにも係らず、ノラが猶あのやうな反抗をして家出をするなどは實に怪しからぬ、と云ふ批評は西洋でも大ぶあつたらしいが、日本でもたび／＼新聞雜誌の上に議論せられた事であつた。

之れに對する博士の解釋は面白い。

『併し作者イブセンに取つては、こゝが寧ろ眼目である。彼の大酒を飮んで不品行をして、妻を打つたり蹴つたりするやうな夫はイブセンの問題外である。ヘルマアは俗の所謂理想的の紳士であつて、如何に腹は立つても、決して暴力などは用ひないのであるが、併しながら尙其心底に女子を玩び物のやうに思つてゐる。可愛がるは表で、裏に眞に愛すべき同胞として取扱ふ心がない、と云ふ事がイブセンの筆誅せんとする點である。他の暴力を用ひたりなどする夫の如きは頭で彼れが眼中にない。

凡そ世の中、彼の桀紂の如き虐政は怖るべく又惡むべきであるが、寧ろそれよりも恐るべきは穩和な專横である。これが却つて人間を墮落せしめる。慢性的であるからして、知らず識らず馴れつこになつて、其壓制に甘んじてしまつて自覺しない。急性的に虐政を施せばどんなぼんやりした者でも堪へられないと思ふ。そこで反抗し自覺する事になるのだが、生ぬるい甘やかすやうな方法で巧に玩弄して行くときは、何時まで經つても其犧牲として自

愛せしめる時が來ないから、詐りは人間の墮落を釀す。

此の意味から見ると、ヘルマアのやうな夫が却つて宜しくない夫ともなる。眞文明の見地から謂ふと斯くの如きが一種の油蟲である、と解するのがイブセンの皮肉な見解である。』

これ程の明快な解釋に對しては、僕も亦一言の加ふべき文字を持たない。しかし斯う云ふのが宜しくない夫ともなるとか、これがイブセンの皮肉な見解だなどと云ふのは、恐らくは博士の例の馬鹿が哭した言葉で、實は斯う云ふのが本當に恐るべき宜しくない夫であり、又之れがイブセンの眞面目な見解なのぢやあるまいか。

僕等は殊更に溫和なる專橫を憎む。砂糖水（スキートウオーター）を嫌う。

仇に仇を

そして博士は更に其愚を發揮して、こんどは博士自身の『疑問』を出してゐる。

『ノラは夫が何うあらうと妻たるの本分だけは飽くまでも盡さうなど〻云ふのではない。その勞力に對する何等かの報償を求める事を忘れない。隨つて夫の自分に對する態度の自分が夫に對する態度と同一平等でないのを知つて、全く案外に感じ、豁然として自覺したのである。愛の本來は果してかく打算的なるべきものであらうか。』

『男性に有りがちの一時の怒に乘じた』ヘルマアの失言をたてにして、『八年の情交を一夜に弊履の如く拋棄されてたまつたものでない。』

『家庭と個人、個人と社會との關係は引離す可らざる程に密接なものではあるまいか。』

先きには溫和なる專橫に反抗する事にすら理解のあつた博士が、一變して此處に打算的道德を罵るの矛盾を、僕は敢て笑はない。繰返して云ふ。博士は老人である。馬鹿で利口で利口で馬鹿な人である。

同じ人間の男と女とが主人と奴隸に分れ、所有主と玩弄物との關係にある間、奴隸又は玩弄物に向つて夫夫たらずと雖も妻妻たり的の道德を說くが如きは、是れ實に奴隸又は玩弄物に取つて忍ぶ可らざる侮辱である。斯くの如き道德の遵守せられる間、奴隸は永久に奴隸たらざるを得ない。玩弄物は永久に玩弄物たらざるを得ない。ノラの自覺はこゝに在るんだ。

厚意に報ゆるに厚意、惡意に報ゆるに惡意、寬容に報ゆるに寬容、苛酷に報ゆるに苛酷と云ふやうな所謂打算的道德は、されば奴隸又は玩弄物の

當然の權利でもあり、又當然の義務でもあるまいか。更に一歩を進めて云へば、之れあつて始めて人類の間に本當の秩序と平和とが齎らされるのぢやあるまいか。

又飜つて思ふに、所謂打算的道德を罵る道學者連の仇に報ゆるに恩を以てする的の道德も、それが自分に取つて内心甚だ痛快であり、又實際に却つて著しい効果があると云ふやうな、矢張り其の本當の奥底には一種の打算的精神が籠つてゐるのぢやあるまいか。僕等とても亦、純粹の個人的關係に於ては、往々此方法による。

それから男性に有りがちの一時の怒と云ふが、之れは奴隷たる女に對する主人たる男の多年の輕侮から出た、女としては見遁す可らずる男の成心からぢやあるまいか。

終りに家庭と個人、個人と社會との關係の引離す可らざる事は今更に云ふまでもない。しかし家庭の爲に個人があるのぢやない。社會の爲に個人があるのぢやない。こんな事は事々しさうに改めて云ふのも馬鹿々々しい。

本能と創造

最後に同じイプセンの『建築師』の中のヒルダを說いた、博士の文句を引く。

ヒルダは、

『其場、其時に斯うと感じた事を其儘に實行してしまふ女なのである……考へてはゐない、躊躇しない……萬事本能でやつて了ふ……外國の近代小說中には、こんな肌合の女が折々寫される。……これは頗る意味のある事で……餘り文明が進んで、智育が行屆き過ぎて來たので、人間が神經過敏になつて智慧が煩細に働き過ぎる所から、昔は勇氣に秀でゝゐた男性の中に、今は甚だ臆病な取越苦勞ばかりをする女の樣なのが輩出しはじめた。丸で最高度の近視鏡を掛けて危い棧橋を渡る樣な心持になつてゐる男が多く、餘り案じ過ぎて足も手も出し得ない樣なのも少なくない。(要するに)智識が進み過ぎて、誰れしも昔程に衝動的には仕事が出來ない。それに比べて見ると、女は本來が感情的に生れついてゐるので、男の餘り智慮が過ぎて臆病で何事も斷じ得ないのを女が本能で補ふ。時としては思ひ切つた英斷を行ふ……』

僕は此の衝動的行爲或は本能的行爲と云ふ事に重大なる意味を結びつけたい。即ち本能の偉大なる創造力を考へたい。

僕は此の衝動的行爲或は本能的行爲が、近代のあまりに聰明なそしてあまりに優柔不斷な青年に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

對する一種の解毒劑となり、そしてベルグソンの所謂創造的進化の一原動力となつて、現代の沈滯し切つた頽廢的氣分を救ふ重要な一要素となるものではなからうかと思ふ。そして民衆の精神が原始的狀態に復歸して、總てが本能的となり創造的となり又詩的となる時、其處に歷史の繰返しが起ると云つた、フイコーの所謂リコルシ論なども、此點から見て多少の意味があると思ふ。

　本能は盲目だ。從つて本能其儘の表現は多くの誤謬を伴ふに違いない。けれども失敗は猶無爲(イナクテイフ)に優る。可なりの誤謬は犯しつゝも、猶多少の長い間これを續けて行く時には、やがて本能の行爲其物にアイデヤが出來て來る。人の行爲を律する在來の多くのアイデヤは、在來のミリユーの間に出來た舊人のアイデヤである。新人は此等の在來のアイデヤを棄てゝ、更に新人自身の新しきアイデヤを創り出さねばならぬ。

　猶之れに連れて面白いのは、ヒルダが『神をも輿論をも習慣をも道德をも悉く撥無せんとして、又自主自由にあこがれて、中古時代の北蠻海賊の話などに、眼の色を變へて聽き惚れる』と云ふ事だ。これも現代のあらゆる桎梏と壓迫に堪えかねてゐる、湧き返へるやうな本能の所作と見るの外はない。

　少年の胸には、驚異を愛し、冒險を好み、剛勇を懷ふの本能が溢れてゐる。そして此の本能は久しい間秩序の名の下に壓へつけられてゐたが、やがて其の周圍に頽廢の空氣が漲つて來ると、それが直に少年の銳感な心に感染して、忽に又爆發し出す。數年前から歐羅巴の諸國で隨分やかましいそして日本でもそろ／＼問題になりかけてゐる、所謂惡德文學の流行なども實は其源を此處に發してゐるものとしか僕には思へない。

　僕等は野蠻人ぢやない。從つて原始人的に本能的行爲を逞しうする事は出來ない。僕等には原始以來の積蓄した經驗と智識とがある。そして多くの近代人をしてイラ／＼させ又はやるせながらしめる此の經驗と智識とは、却つて僕等の本能の多くにモーラルを與へアイデヤを與へて、僕等に勇猛精進の努力を添へてくれる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

本當に瞞されて居る男

伊庭孝

男。貴女も世間が變つて來たと云ふ事に氣が附くだらうね。それがどういふ風に變つて來たかといふと、皆が爭ふようになつて來たのだ。

女。それでは生存競爭が激しくなつたといふのですか。

男。生存競爭と云ふやうな、生やさしい爭ではなくなつたのだ。成程昔は強い者が弱い者をいぢめてゐた。主人が奴隷を苦しめてゐた。金持が貧乏人を自由にしてゐた。然し今の世の中は丸で變つて來た。

女。今だつて弱い者はいぢめられてゐるではありませんか。

男。そんな事を云つてゐるのではない。昔いぢめられてゐた者、即ち弱い者や、奴隷や、貧乏人やは、今はずつと強い者になつてしまつた。昔も金持で、今も金持の者があるけれども、昔あつたやうに決して幸福ではない。人生といふ者は、自動車に乘つたり、立派な家にはいつたりするのが、至上の幸福ではないのだ。男が女を獲、女が男を獲る事が一番幸福なのだ。

女。女は屹度さうでせう。けれども男には事業といふものがあるではありませんか。私も次の世には男に生れて、自由になつて、事業がして見たいのですわ。

男。それは男にとつてはつまらない事だといふ事を、女は知らないのだ。事業とか、金とか云ふやうなものは、丁度雄鳥の美しい聲や、羽のやうなものだ。雌を呼ぶ爲めの飾りにすぎない。

女。事業がなくても、金がなくても、いゝ人になら女は惚れますわ。事業や財産などは何でもなくつてよ。

男。女は惚れるといふけれども、その惚れるといふ事が、女の武器なのだ。男の方でも惚れるといふ事があるけれども、男の惚れる時は、既に自分の蓄積してゐた富と事業とを女に捧げるといふ意味なのだ。男の惚れるといふ事から、何物も發生しないのだ。男の惚れるのは消費だ。

女。それは馬鹿な男のする事ですわ。男の人は大抵は――いゝえ皆な薄情で、仲には隨分女を裸にする人もありますよ。それは女の方でも惚れゝば裸にもなりますわね。

男。それは男が爲た仇打なんだよ。何故仇討だかといふのに、男

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は過古の長い勞苦の結果を、女に惚れた爲めに、消散してしまうのだらう。さうして親も子も孫も、男といふ男は皆そんな苦い經驗を嘗めて來たものなのだ。だから廣い世間には、折々女に仇討をする奴が出て來るのだ。

女。それでも女にどうして、そんな男の持つてゐるものを奪ふ力があるのでせう。

男。女といふものは、男が汗水たらして造つたものを、たつた一つの方法、卽ち女から惚れるといふ容易い爲事で奪つてしまふのだ。

女。おやァ女から惚れたら惡いのでせうか。

男。惡いとか善いとかいふ差別は、それは昔の人の云ふ事で、吾等の知つた事ではない。兎に角、男は女に其の持てる物を捧げてゐたのだ。其報酬として女を自由にする、若くは征服してゐたのだ。それが今迄の男女の狀態だ。然し事業とか努力とかゝ、男子の生命であるとすれば、男は女を征服したと思つてゐながら、實は自分達の血を吸ひとられてゐたものなのだ。

女。男といふものは、ほんとにそんなものなのでせうか。して見ると隨分馬鹿ね。だけれども私そんな熱心な人なら、やつぱり私の方から生命を投げ出しても宜いわ。しかしそんな人は今時ない事よ。

男。さうさ。然しそれは皆女が惡いのだ。女といふものが、惚れるといふ事に對して、男の何物をも捧げるといふ事を知りぬいてそれが娘なり孫娘なり、後の女に先天的に傳はつて、女といふものは、今度は本當に惚れずに、惚れて男が跪くと直ぐに逃げる。そして男に追つて來させるといふ技術を作り出してしまつたのだ。その爲めに男はどれ丈苦しめられたかしれやしない。

女。そんな事はないわ。斷じてないわ。

男。所がある。貴女は知らぬ事、女には其技術がある。自分が經驗で編み出した技術ではなくて、親の代から傳はつた技術だから分らない丈の事だ。

女。さうでせうか。然し私はそんな面倒な事はきらいよ。惚れた男になら手加減などは要らないではありませんか。一筋に惚れていつたら宜いんだわねえ。

男。だけれども、女といふものは殘酷なものでね。男といふものがどれ程苦しい悶えをもつてゐるかといふ事を知らないのだ。女と會つて、それから別れてゐる暫くの間。男はきつと自分の樂しみの爲めに、事業に熱注してゐるものだと女は信じてゐるに違ひない。それで男に對して強い嫉妬心を持つてゐるのだ。それだから女は、再び男に遇ふ時に、ひどく油を絞るのだ。

女。だつて男は浮氣をするんですもの。

男。そらそんな單純な事を考へてゐるのだから、男は實に堪らないといふのだ。男が浮氣といふものを爲たとしても、それは女を輕蔑する爲めの行爲ではない。女といふ者に對する苦悶を免れる爲めの姑息な手段に過ぎないのだ。といつても分るまいが、男は女と會はずにゐる間、女の事に就てはどれ丈悶えるか知れない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

然もその鬪えが理窟のない鬪えだから、つまり女のやうに嫉妬から來る鬪えでないのだから、鬱を散じやうとするのだ。

女。さうだとすると、男といふものは廻り諄いものですわね。女の事が氣になるなら何故女の傍にひつゝいて居ないのでせう。私たちは惚れた男なら朝から晩までも離れずに居たいと思ひますものを。

男。いゝや、さうはいかないのだ。昔の領主が高尾を買つた時のやうな高壓手段なら兎も角も、本當に女に愛されてゆかうと努力する男は、女に對して非常な克己をするものだ。惚れてゐる者の側を離れたくないといふ情は男の方が強いのだ。女の方が必ず弱いのだ。それだから男は少しづゝでも側を離れてゐなくてはならない。少くも女がいろ／＼の素氣ない素振りで、男に離れて居させるのだ。すると男の方でも、憧憬の心が彌增して來るといふものだ。女の髮についてゐたリボンの片や、女の與れた寫眞などを眺めてゐるのは男だ。女は決してさういふ事は爲ない。男から得可き利益の計算をしてゐるのだ。さうして男を他處へ取られぬ丈の準備はしてゐるものらしい。

女。そんな事がありますか。私たちはいつでも男の人に棄てられるのですよ。

男。それは棄てるのではない。男の力が及ばなくなつて降參して逃走してしまふのだ。それ程ひどく女が男をいぢめつけたのだ。男もさういふ爭ひには疲れきつてしまふのだ。それだから、近代の男は、女と戰ふ事を考へたのだ。

女。戰ふのですつて。

男。さう、性の爭鬪とでも云はうか。男が女を獲、女が男を獲るのは、爭鬪の如きものだ。兩方が堪へられない本能的の愛着心を持ちながら、克己と努力とで、相手から離れようと努力して見るのだ。さうして、相手に自分を追はせうとするのだ。異性から逃げるといふ事は、口で云ふやうに出來るものではない。自分では逃げる／＼と思つてゐても、本當は逃げてゐないのが多い。さうしていつか、異性に囚はれてしまふのだ。いたましい爭鬪だ。これこそ本當の本能を刺戟する爭ひで、もう男の財産や名譽やなんかは、戀愛の中に交つてゐないのだ。近代的の戀といふのは、斯ういふ爭鬪の形式となつて表はれて來るのだ。

女。まあいやですわね。私なんかは、そんな面倒な掛引はきらひです。惚れたとなつたら一心に惚れるのよ。何故かといふのに、私は男が好きなんですもの、男が嫌ひだと云ふ事は云へないんですもの。實際どの女だつて、屹度男が好きなんですわ。男が嫌ひと云ふ人はない筈です、だから好きなものは好きで宜いぢやありませんか。それを態々逃げるとか追ふとか、つまらない事よ。私はそんな事をする男より一圖に惚れて與れた男になら命も何も捧げるのです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

男。それはさうだらう。僕の云ふのは、たゞ一般に女性が斯うなつてゐるといふのだ。然し世の中には例外といふのがあるから、貴女などは其の例外かも知れない。ともかく女といふものは斯ういふものなのだ。

女。女にそんな爭ひの力があると思つてゐらしつたらそれは大間違です。私たちは誰かにすがらうすがらうと思つてゐるばかりです。とうして、誰かを楯にしてやらうなんて思ひませう。それは隨分私だつて、男を瞞した事もありました。だけれどそれは男が金を撒きたがつて、ムズ〳〵してゐたから、私が手傳つて撒いて上げたのです。私の懷ろへ捥ぎ取つたのではないのです。さういふのと、女が惚れたといふのとは違ひますわ。女といふものは男が動かす事の出來ないものと思ふのは大變な間違ひです。男ばかりが女を好いて居て、女はちつとも男を好かないものだと思ふから、やれ爭ひだの何だのといふ事になるのです。女は男を好きなのですから。

男。それはさうに違ひない。私たちが聞える丈のものは、女も聞えるとは思ふが。然し女といふものゝ全體からいふと。

女。全體の女といふのは何です。女といふものに惚れるのですか貴君は。成程女といふものは、どんなものだか、私なんかは知らないのです。然しあなたの惚れるのは、あの女この女でせう。あの女はそんな女かも知れませんが、此の女はどうです。女といふものはといふ青眼鏡をかけて、この女もあの女も同じ色に見るからいけないのですよ。惚れぬ〳〵といふ人は男にも女にもたつたひとりです。其のひとりの胸さへ分れば、あの女全體なんかどうでも宜いではありませんか。この女にはこの女に對するやうに爲て頂戴よ。

男。私も近頃さう考へ出したのだ。たゞ申し遲れた丈だ。男といふものは、過去に會つた苦い經驗で、女といふものに對しては、非常な用心をするものなのだ。さうして充分の武裝をしてかゝるものなのだ。私も丁度貴女にさうしたのだ。然し私の弓も矢もあなたの體には當らない。やはり眞心といふものが、鎧を通して出るものであるといふ事が段々わかつて來たのだ。然し、私はこれが危險かとも思つたけれども、武裝を解かうと思ひ出したのだ。

女。さうして私と膝をつき合して下されば宜いのよ。私たちは男と同じ屋根の下で、勢力爭ひをしてゐる氣はないのですから。さうしてたゞ可愛がつて貰へば、それで安心してゐるのです。

男。弱い女といふもの程、なつかしいものはない。私などは長い間、強い女の間にゐて、虛僞の中から眞實を探し出さうとして、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

段々に衰へてしまつたやうな氣持がする。本當に惚れぬくといふ事は、そんな手間のかゝる、水臭いものではないのかもしれないれ。私の今迄してゐた事は、凡て男といふものが、女といふものに對する防戰だ。私もよく貴女といふものがわかつたやうに思ふから、これからは、私が貴女を愛するのだ。男が女を愛するのでなくて、人間が人間を愛するのだ。私が貴女を愛するのだ。

女。始めつから、さうではないの。

男。それは私の憶病だつたのだ。いやむしろ吝嗇といつた方が適當かも知れない。私の寶庫は充分に開かなくてはならない。貴女のやうに素直に育つて來た女には、私のやうなねぢけた男の弓矢は、さぞ不可思議に思へたらう。然しそれは過古の事だ。丁度親が子に溺れるやうに、私は人間に溺れる事が出來る。貴女に溺れる事が出來る。これが若し男と女とであつたら、私が女から輕蔑される事がどれ丈か腹立しからう。然し貴女の前に私が馬鹿に見えても、私には何の憾みもない。たとひ私が貴女に瞞されたとしても、口惜しくは思はない。それは旣に性の爭鬪でなくて、人に對する愛になつてゐるからだ。

女。何の愛でも、私は廻り諄い事は嫌ひなのですからね。惚れたら惚れたで、本當に惚れるのです。惚れた眞似や、惚れない眞似や、そんな面倒な事をする位なら、始めから惚れないのです。惚れた以上は、もう馬鹿です。馬鹿で宜いのです。女はさういふ馬鹿な男が、一番いとしいのですからね。

界、さうだらうか。然し兎も角私は馬鹿になれる男だ。

女。そうよ。爲れるわ。だから私が可愛がつて上げてよ。よくつて。さアこつちをお向きなさいな、え。

男。うむ。（と振向くトタンに絶息す。）

新しい戯作者

山本飼山

■『一體人といふものは盲目的に過去の傳習やコンベンショナルな思想に附和雷同すべきものではない。嚴正なる科學的批判の手段に依て自分自身の爲めに自分自身の信條を作り出し、且つ此の信條を實際生活に現はすべきである。祖先の考へた通りに考へ、祖先の生活した通りに生活するのは『眞の道德的の人間』を作る所以ではない。又如何にインデペンデントリに考へて自分自身の信條を作り出したとしても之を實行しやうと努力もせず犧牲も拂はぬやうな人間は不道德的な奴である。』とは、千八百六十年代の露西亞哲學の倫理的方面を代表するピーター、ラブロフの言である。僕は今日の智識階級の若い人達に此の言を呈し度い。

■僕は今日の若い智識階級の人々の聰明に驚かざるを得ない。彼等はよく知りよく語る。歐米に新しい思潮運動が起れば直に之を紹介してその聰明を誇つて見せる。然し彼等は只知るのである。彼等は曾て彼等の智識言說に相應しい實行を一つもした事が無い。眞面目に努力とか犧牲とかいふ態度、否、氣分すらも彼等は

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

持つて居ない。彼等は如何してもルーヂンの徒、オブロモフの輩である。實行の滿足なしには生きて居られぬ僕等とは餘程緣遠き人達である。

■早稻田派の或る文士は嘗て『自然主義諸作家の作品を蔽ふた徹底的な絶望の氣分』といふやうな事を云つた。徹底的な絶望？、今日の文學者の實際生活に果して徹底的な絶望と云つたやうな調子があるであらうか。少くともその作品に徹底した絶望と云つたやうな強い色彩が見へるであらうか。徹底といふ言葉、絶望といふ言葉には餘程痛切なトーンが含まれて居るべき筈である。然るに僕等の眼より見れば彼等の生活は『徹底的な絶望』に非ずして、『不徹底的な優柔不斷』である。人間として當然有すべき實行本能を欠ける『オブロモフキスト』である。青い酒と若い女とに對する時の外、何等自己に對し又社會に對して努力的な犧牲的な態度に出づる事のない生活――かゝる生活に對して徹底的といふ形容詞を被せるのは、要するに自分達の圈以外社會人生に對する無智識無關心の結果だ。

■今日の若い智識階級の人達は、人間として當然持つべき感情と理解力とを缺いて居るのではあるまいか。『靑年よ、諸君は暖かき感情を以て社會を見ざるべからず』と露西亞の或る哲學者が云つたその暖かき感情を彼等は果して持つて居るであらうか。僕等は彼等の心理狀態に大なる疑惑を抱かざるを得ない。試みに彼等の作品を見よ。悉く是れ狹隘なる主我心の現はれに非ざるはない。彼等は『痛ましや、パンは奴隷の手に作られたり』と叫んだ、ネクラソフの心情をも知らなければ、『世の中には苦しんでゐる者が數限りなく在るのに、何故お前達は私に許り氣をとられて居るのか』と云つた死んだトルストイの心持をも酌み取り得ない藝術家である。彼等を歐米の――少くとも北歐の――文學者に比する時、彼等の血脈には所謂戲作者的血液の多量に流れて居るのに僕等は少なからぬ嫌惡の情を禁じ得ない。

■ロバート、ハンタアはゴルキーを評して云つた。『ゴルキーはレヴオルターである、世の常の文士の如き書齋的の人ではない。彼は活動的な計劃の多いレヴオリユウシヨナリーである。若し諸君が一度ゴルキーを見るならば諸君は直ちに彼の精力の源を解するであらう。彼の眼――炯々たる探海燈を思はせるやうな眼――は事物の內面に透徹せずんば止まざる視力を持つて居る』と。日本にもゴルキーの作は隨分紹介された。然し彼のやうな作家は一人も出て居らぬ。僕等は彼の如き男らしき、民衆に對して燃ゆるやうな同情心を切に要求する。

■ステプニアクはツルゲネフを評して云つた。『彼は決して如何なる教義をも說かない、然し彼はその申分なき藝術的筆致に依て生きて居る男女を捉へて、かゝる男女の間に或る思想、或る教義を具體化するのである。而してかゝる思想や教義は決して彼の心中より作り出さるゝのではない。彼は之を現實の生活より取り、その汲めども盡きざる藝術家的本能を以て或る一のムーブメントを、漸くその時代の歷史的現象とならんとする初期に於て捉へ來るのである。斯くの如くにして彼の小說は近代露西亞の思想史の藝術的概說であり、又その智的發達の有力なる道具である』と。斯かる作家を有せる露西亞の文壇は幸福であつた。斯かる作家に材料を供給するを得た露西亞のインテレクチユアルスは光榮であつた。僕等は日本の思想界を顧みて寂寞の感に堪へない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大杉と荒畑

堺利彦

大杉と荒畑とが此の雜誌をやる。二人は自ら此の雜誌の上に於いて自己を語る。又自ら語る以外に於いても、二人の人物性行は自然に此の雜誌の上に現はれて來る。然し、それと同時に、傍らから此の二人物を紹介して置くのも、亦決して興味の無い事ではあるまい。

年は大杉が二十八、荒畑が二十六、丁度新しい仕事を始めるのにふさはしい年恰好である、そして二人の性情の差異が、亦丁度組合つて仕事をするに適當した配合を爲して居る。

大杉は大膽な、强情な、押の强い男である。軍人の血を受けて軍人の敎育を受けかけたと云ふ點から考へて、若し軍人に成つて居たら、實に好個の軍人に出來上つて居たであらうと思はれる。

と云つて、彼は決して頑鈍粗野なる木强漢では無い。彼れの半面は明敏穎悟である。彼は軍人敎育を受けかけた後、外國語學校の佛語科を卒業した。佛語の外に英語も出來る。獨、伊、露、西等の諸語もかぢつてゐる。エスペラントといふ新語の通を以て目せられた事もある。彼れの學問は廣いとは云はれぬ。或は深いとも云はれぬかも知れぬ。然し彼れの理解は極めて明瞭である。

荒畑は淚もろい、激し易い、詩人肌の男である。横濱の遊廓の間に成長して、小學以上の學校にも行かず、少年の中から歌なぞ作つて、總てに感傷悲哀の調を帶びて居た。それで若し其向に進んで居たら、今の謂ゆる文士のチャキ〳〵に成り濟まして居たであらうと思はれる。

然し人間は誰でも中々復雜に出來て居る。彼も何時まで歌ばかり咏じては居なかつた。彼は獄中に於て英語の讀書力をも養つた。此頃では露語にまで指を染めて居る。そしてツルゲネフや何かに讀みふけると同時に、ヘッケルの著書をも大抵讀み盡すといふ樣な傾きをも生じた。

二人とも敵に當るの力は甚だ强いが、其の行き方は違つて居る。大杉は其の鐵板の如き度胸の力を以てドシンと打ッつかるが、荒畑は其の利劍の如き感情の切尖を以てズカリと刺し通す。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

文に就いて云へば、荒畑は才氣縱横、奇抜にして巧緻、殆んど天成の文人である。大杉に至つては、未だ十分に專問文士たるの技倆を示した事は無いが、而も彼れの文は常に直截簡明、理義透徹、正々堂々の趣きを具へてゐる。そして又、時としては存外輕妙な文字を作る事もある。

辯に就いて云へば、大杉はドモリである。エンゲルスが二十個國の語でドモつたと云ふ話があるが、大杉も亦五六個國の語でドモつて居る。尤も三宅雪嶺さんがあのドモリで演説家になつて居る如く、大杉も亦ドモリながら善く明晰な講話などをやる。荒畑に至つては、其辯は其文と同じく天成である。彼れが其の情の走るに任せて、夢中になつて路傍演説をやる時の如き、殆んど人をしてホレ／＼せしむるに足るものがある。私は曾て彼れが火の如き路傍演説を終つた時、傍らなる少女が我を忘れて進み寄り、其の香氣紛々たる絹のハンケチを以て、彼れの汗を拭はんとした光景を見た事がある。

大杉は斯くの如く辯に拙であるが、それで居て存外、人との應接に洒落な所がある。此の雜誌の經營に就いても、自分で大分廣告など取つて歩いた。重ねて云ふが、人間は中々復雜なものである。傲岸尊大、人を人とも思はぬ様な大杉が、又思ひの外、愛嬌者になる事がある。彼れが病身なる細君の爲に、時として水を汲んだりして居るのを見ると聊か滑稽でもあり又極めてイヂらしくもある。

荒畑にも亦、其の涙もろい悲哀の調の半面に、打つて變つたヒヨウキンな趣きがある、談話に於いても、文章に於いても、諧謔皮肉百出して、圓轉滑脱の妙を極める時がある。彼も決して泣いたり怒つたりばかりして居る男ではない。

風采から云へば大杉は白皙長身のハイカラである。洋服などの着付も甚だ氣が利いて居る。ネクタイの色の好みなども頗る澁く凝つて居る。荒畑はそこになるとカラもう駄目である。其の眼と眉とは頗る婦人の心を牽くに足るものあるに係はらず、何時も大抵薄汚いシホ／＼としたナリをして居る、たまに洋服でも着ると、大分見上げた風采にも成るが、それも猫脊でブチこはして了ふ。

二人とも酒は飲まぬ。大杉は煙草を嗜む。荒畑は爪をかぢる。モウ此の位にして置かう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

ラファルグの認識論

小原慎三

一昨年のノイエ・ツァイトに、ポール・ラファルグが認識論に關する一文を發表してゐる。

抑も人間の感覺は錯誤が多くて不正確なものだとの說は、遠く希臘時代の詭辯論者が稱へ出した問題である。

譬へば物理學者のブロンドが發見した、燐光膜に現れたるN光線の如きは、何人の肉眼にも確に映ずる事は映ずるが、實際研究して見ると之れは一種の幻影或は錯覺に類するものに過ぎないといふ事が解つた。又或光學者は、吾々が日常仰いでゐる輝々たる太陽も、若し吾々が飛行機に乘つて地球の雰圍氣を離れて之れを眺めたならば、恐らくは黑色に見えるだらうと主張してゐる。更に又、同じ物を見た數名の人が是れに關して爲せる報告を調べて見ると、種々雜多に相違する場合が多い。

プラトーやカント等が金城鐵壁と賴んでゐた所謂純正理性なるものも、其根本に橫はる感覺が斯の如く不確實にして錯誤に富んだもの　ゐる以上は到底十分信賴すべき價値はない。又ソクラテスやトーマス・リード等が規矩準繩としてゐた『健全なる了解力』といふ樣なものも、同じく感覺を基礎としてゐる以上は、不確實な者と曰はねばならぬ。

ヴイコウの說に依ると地球上に散在してゐる各種の人類社會の有する格言とか諺とかいふものは文句や發表の方法は相違してゐるが其思想の中核は常に一致してゐるといふ事である。又國家や家庭の組織及び財產關係や生產方法等が期せずして相一致してゐる處を見ると、人類は尠くとも全體に共通の最少量の認識力を有してゐるものだと斷言する事が出來る。

此最少量の認識力が人類に存在してゐる事は吾人の到底否定し能はざる事實である。而して此認識が直接に科學の基礎を爲すものであるかといふに決してさうでない。人類共通の最少量の認識力は、要するに全然五官の產物に過ぎないから、此の五官を基礎とした認識の上に築き上げた科學は其根本が薄弱である事を免れない。

然らば近代の科學は果して何を基礎としてゐるかといふに、其特徵は直接五官に依らないで、物質の他の物質に對する認識力を應用して物質の眞相を極め樣といふ點に存するのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

物質の認識力といへば語弊があるかも知れないが、今例を擧げて説明すると、吾人は手に依つて物體の輕重を知る事は出來るが秤の精密には到底及ばない。又皮膚全體の神經に依つて冷熱を感ずる事は出來るが、鋭敏なる水銀柱の昇降が示す正確なる溫度を知る事は不可能である。天文學者が幾ら眼を見張つても到底見えない微細な星や稀薄な星雲も、寫眞の種板の上には何の苦もなく現れて來る。又牛乳や酒に混じた水の分量を檢査する場合に於ても、吾々は眼で見ても舌で味はつても決して正確なる判斷を下すことは出來ないが、金屬板の感電性を應用した一種の機械に依つて確實に是れを知る事が出來る。其他リトマス試驗紙が化合物の酸性鹽性を識別し、音響の大小は音波の差異に依つて精密に計量される等、吾人は直接五官を以ては殆んど知り得ないことを或物質の特殊の感受性を利用して容易に判別することが出來るのである。

一體五官の感覺は靑とか赤とか長いとか短かいとかいふ物の性質しか知ることは出來ない。卽ち五官は外界の現象を認識するのみに止まる。然るに物質を應用した認識は現象の代りに物の數量的關係を示すものである。譬へば吾人は皮膚の神經に依つて唯だ熱いとか冷たいとかいふ漠然たる差別を感じ得るけれども、寒暖計の水銀は正確に何十何度といふ數字を以て溫度を示してゐる。又色彩は吾人の眼には唯だ黃とか紫とかいふものにしか映じない。然るに物理學者は精巧なる機械を以て、此二樣の色彩の差異をエーテル波動の差異といふ數量的關係に依つて認識する。

故に五官の認識と、物質の感受性を應用した認識とは全然其性質が異つてゐる。卽ち前者は物を質として認識し、後者は量として認識する。

古來數學論理學の如き抽象科學は、比較的蹉跌することが尠かつた。蓋し是等の科學は人間の感覺と何等相關する處が無かつたからである。例へば數學の如きは、個々の物體から數とか形とかいふ特殊の屬性を抽象して徹頭徹尾論理を以て築き上げたものである。故にユークリツドやロバチエフスキーやリーマン等の幾何學は、各自矛盾衝突する點があるにも關はらず、一般に數學者から眞理と認められてゐる。

處が五官の認識に代ふるに機械の認識を以てせる近代の自然科學も、直接五官に關係しない事は數學や論理學等の如き抽象科學と敢て異る處はない。近代科學は物質が感覺に及ぼす結果を研究の基礎とするのではなくして、一の物質が他の物質に及ぼす影響、卽ち一の物質の特殊の感取性を應用して他の物質の性質を明にせうとするのである此確實なる純客觀科學こそ眞に、プロールタリアンの科學といふべきである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

怠惰者

荒畑寒村

一

夏になつた。烈しい日光が、製鑵部の亞鉛屋根に、またドックの内の海水に、眩ゆいやうに反射する夏になつた。

六月の初めから、出勤と退出とが卅分宛早くなつた。晝飯の時、僅かに卅分の休憩時間がある外一日十時間一寸腰を下す間とてもない勞働に、彼は下宿に歸るともう何をする氣力もなく、只だ何ものにも妨げられずに、翌朝再びそのトイルをくり返す時が來る迄、死んだやうに熟睡するのが望みでもあり、樂しみでもあつた。よし日曜や祭日があつたにした處で、廿五錢の日給を貰つて、六圓の下宿料を拂はねばならぬ彼に、死の如き熟睡以外、如何な快樂を求むる事が出來やう。彼は同じ十七八の職工仲間が煙草や、買食や、芝居や、寄席や、女にさへも使ふ夜業の工賃を、散髮代や湯錢に充てねばならなかつたのだ。で、卅分早くなつた出勤に馴れる迄は、彼は可なり苦しい努力を續けた。十分でも、五分でも、鴉片の痲醉のやうに快い眠りを貪りたい彼には、夜どんなに早く寐ても、朝今迄よりも卅分早く起きるといふ事は決して容易い事ではなかつた。

それに彼は此頃、脚氣が起つた氣味なので、長く立つて働くのが實に苦しかつた。些し歩くと自分にも驚くやうに心臟の鼓動が烈しくなり、脚はまるで知覺を失つて、膝は他愛もなくガクガクする。胃の中に重い澱みでも出來たやうに、何を見ても食慾が起らなかつた。殊にやゝ汗をかいた麥飯と、牛蒡の煮付の辨當は、開けたゞけで食ふ氣がしなかつた。それでも此頃は、ボートやカッタアの修繕に急がしいので、彼は苦しいのを堪へて夜業などをやつた。

『今日は如何する?』、夜業したつて、そう座りたがつて許り居ちや仕樣が無へ。働けねへ位なら歸

つて寐るんだ、いゝか。』よく伍長にそう云はれたが、彼はそれでも夜業をした。夜業の工賃は、一時間に就て各自の日給の一割づゝだつた。で、彼は蒼い、ムクんだ顔をしながら、大きな、頑丈な職工と一緒に、大鉋を引いたりした。

二

彼はよく門限に遲れた。

それは寐そびれて遲れたのは、一度か二度で、大方は今起きなければ遲くなると知りつゝ、如何しても起きる事が出來なかつたからだ。彼は夜寐床に入ると、疲勞の反應の爲に神經が昂つて、いつも容易に寐付かれなかつた。そして曉方眼をさますと、身體中が碎かれたやうに懶く、膝から下はウズいて、拔けて行くやうなダルさを感じた。こういふ時、彼には慾も得もない。一日食はないでもいゝから、インタアラプトされぬ熟睡に落ち込みたかつた。鉋を砥がせられたり、大鉋を引かされたり、重い松の角材を荷はされたりする事なしに、恣まゝに四肢を伸して寐て居たかつた。然し亦、下宿の妻君の聞へよがしな罵詈を聞くと、彼は到底ヂッとして居られなかつた。

『怠け者ッ、膳が片付かなくて仕樣がありやしない。幾らも取るんじやない癖に、よくァ、怠けられるなア。』耳を欹てゝ聞いて居る彼は、大聲にこう云ふのを聞いて、ヂーッと睨みつけて居るのも度々だつた。然しそういふ場合、彼は大低悄々起き上つて、默つて、マヅそうに飯を食つて出て行つた。

で、マア門限に間に合ひさへすれば、彼も觀念してどうかこうか一日の仕事をすませて來たが、もし一分二分でも遲れやうものなら、もう意地にも門を潜る勇氣が出なかつた。五分以內の遲刻は日給の十分の一、十分以內は五分の一、卅分遲れると半日分の工賃を引かれねばならなかつた。それより猶厭なのは、鞭の如く顏を打つ監視の睨みと刑のやうに心を刺すその訊問とで、いゝ加減な遲刻の理由を作るだけでも可なりの苦痛だつた。それがすむと、今度は氣難かし屋の組長に何とか云ひ譯せねばならなかつた。それがいつも屹と、『定つてやがる』と云つたやうな、インクレヂユラスな冷笑と、『云ひ譯はいゝから、怠けないで確かり働け。』と云つたやうな皮肉な語に迎へられる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

そういふものが、その後門限に遲れた時、彼をして愈々出勤を厭がらせる原因だつた。

三

彼は今朝、グワ……ッといふケタヽマしい汽笛に交つて、カン／＼カン／＼響く鐘の音を、夢とも現ともなく聞いた。そして『ア、もう始業だナ』と思ひ乍ら、猶その身も魂もレザインして居る、甘い麻痺からさめる事が出來なかつた。

すると突然、

『安田さ……ン、始業の鐘が鳴つてるじやないかッ。如何したんだらう、マア、もう行つたと許り思つてたのに……。』といふ下宿の妻君の絶叫に、彼は吃驚して飛び起きた。

『もう始業の鐘が鳴つたんですか』彼は先刻夢中に聞いた鐘の音を想ひ出して、半ば私かに恥ぢ乍らまだ全然ホントにし得ないで聞いた。

『お呆けなさんなョ。さア早くお出でなさい、今すぐ飛んで行きや、まだ充分間に合ふもの。』彼はすぐ重い心になつた。そして布團を片づけて、汗と油とに汚れた青服を着ると、顏も洗はなければ飯も食はないで、包んである辨當箱を下げて飛び出した。

六月半ばの空は美しく晴れて、狹い町並の兩側は、眩ゆいやうな日向と、涼しいそして寧ろ暗い位の日蔭とに彩られて居た。

彼は悲しい眼付で見廻した。けれ共もう自分の外町を急ぐ職工の青服姿は認められなかつた。横須賀に特有な、人間の神經を鈍らせるやうな、ガーン、ガーンといふ音響は、もう市街の上に轟き始めた。彼が造船廠の正門に達した時は、毎朝入口に店を出す食パン屋は、既に賣切つて店を閉ぢて居た。彼は木工科の入口を入つて、自分の赤い名札を黑に返し乍ら、自分の組をズーッと見渡した。然し此の二三日休んで居る二三人の外、誰れ一人遲れて居る者はなかつた。

彼は門衞の監視から、型の如き訊問を受けて、組の名と姓名を書き留められた。それから組長の許に行つて、身體が惡い爲にツイ遲刻したと云ふと、組長は『仕様が無い』と云ふやうな顏をした。そして、

『病氣なら醫者にかゝるなり、休むなりするかい。然し日給は貰はうと思つたら、チャンと時間

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

通りに來い。怠けりや詰り自分の損になるんだ。』と云つた。彼は悄々と伍長の處へ行つて、仕事の指圖を受けた。

『クタビレた野郎だなア』

『あんなのにも廿五錢出すんだからなア』仲間の中から、烈しい罵詈を浴せかける者があつた。彼はその聲で誰だか解つたが、それでも默つて、鉋と砥石をもつて、砥ぎ場へ行つた。

四

『やい辰、そんなクタビレ鉋なんか後にして、砥ぎ水を汲んで來い。手前が遲いもんだから、誰も汲みに行きやしねえ。』平素から比較的彼に親切な小野といふ蒼い大顏な職工が、グッドネーチユアを以て云つた。

水道はドックの傍だつた。彼は二つの桶に一杯水を充して、辛とそれを荷ひ歸ると今度は鉋を二枚、鑿を一挺、それから手斧を一挺砥がせられた餘り長くシヤガンで居ると、脚がブルブル慄へ出して、力を入れて砥ぐたびに、何か大きな塊りが嘔げそうに胸元に突き上げて來る。彼は漸くの想ひで、自分の荒削り鉋と、仕上げ鉋とを砥ぎ上げた。すると先刻彼を罵つた一人の青木といふ生意氣なニヤケ男が、

『安田君、一寸こゝへ來て、大鉋を引張つて呉れ給へ。』と、馬鹿にした云ひ方をする。彼は此の男と一緒に仕事をする位、苦痛な事はなかつた。根生の歪けた女が、繼子でも虐めるやうに、只だ意地惡く許り當つて居た。

『確かり引けッ。若い癖にしやがつて、手前見てへなクタビレた野郎はねえ。』口汚く罵り乍ら、彼が握つて居る大鉋の臺を、力に任せては引きつ押しつした。

朝飯を食はないのと、先刻から働き通しの爲めとで目が眩みそうな上、小野が無茶にコキ使ふので、彼はもう足がスクんで立つて居るに堪へなかつた。そして今にも心臟が破れるかと思ふ程、烈しい動悸がする。彼は蒼い顏から、冷たい大きな汗を滴らして、恰で大鉋に曳ずられるやうに、引いたり、押したりして居た。削り臺の陰に隱れて監視の眼を偸んでは煙草を吹かして居た職工の一人が、また新たに煙草を詰め乍ら、

『辰ウ、もう十一時だゾ。』と叫んだ。彼はやつと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大砲のグリップから脱れて、桶を荷つて、晝飯の湯を汲みに行つた。

一組三四十人が呑む湯を、餘り近からぬ製罐部から荷つて來るのは、彼に對しては容易な事ではなかつた。然し一日中、此の時位彼の愉快な時はなかつた。彼はそこでのみ快活な少年に返つて、同じ湯汲仲間と談笑した。彼が殊に親しかつたのは、船渠部の橋場といふ職工だつた。橋場は彼よりも一つ上の十九で、常に蒼白い顏をして、力の無い咳をして居た。此の二人の外、他は皆大人のやうな遊びをして、それを得意氣に、亦面白さうに談り合つて笑つた。十一時半に終業の鐘が鳴ると、皆低い細長い食卓を圍んで飯を食つた。彼は逸早く、マズい麥飯と牛蒡の煮付の辨當を食つて了つて、いつものやうに工場の中央に据ゑたカッタァの底に潜り込んで疲れ切つた體を横たへた。彼は、病氣の苦しさも、日々の味氣ない生活も、遠い土地に貧しく暮して居る父母も思はなかつた彼は亦、湯汲仲間の話を聞く毎に感ずる、深い心の空虚さへも想ひ出さなかつた。只だこうして休める時間が、もう卅分永ければいゝと思つた。

五

彼は烈しく横腹を突かれて、愕然として睡りからさめた。

海から吹いて來る初夏の風の涼しさに、彼は始業の鐘が鳴つたのも知らず、ウトウトと睡つて了つたのだ。で、ハット思つて頭を上げると、伍長が恐ろしい顏をして睨み付けて居た。

『此の怠け者ッ、ズウズウしい眞似をしやがると承知しねえゾ。早く彼の板を削つて了へッ。』

後の半日は、彼に取つては煩はしい、惱ましい不斷にイムポーズされる恐怖と苦痛であつた。些し劇しく働らくと、すぐ目眩ひがして、孕み女のエヅくやうに、ありもせぬ物を嘔げやうとして、絕へず生唾を吐き散した。『怠け者』『意氣地なし』絕へずこう罵られ乍ら、彼は只だ歸つて休む事のみ考へて居た。

『アヽ、今日もやつと終つた。明日こそどうかして休みたい、そして一日寢通して見たい。』彼は重い。ムクんだ脚を曳ずつて、群集にもまれ乍ら歸つて行つた。そう思ひ續け乍ら……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代劇論（上）

荒畑寒村譯

一

近代の意識されたる社會的不安の驚くべき播布は、單に之を傳導的文書の功にのみ歸すべきではない。寧ろその大部分は是を美術、文學、殊には痛感さるゝ不滿足の最も强き解釋者たる近代劇に歸するの至當なるを想ふのである。ミレーが描ける農民の寥廓たる生活、ムーニエが寫せる鑛夫の悲慘なる勞苦にも增して、反抗の精神を呼び醒まさしむるものは、普遍的醱酵の精神と、社會變化に對する憧憬とに、生命の息を與へたツルゲネフ、ドストエフスキー、トルストイ、アンドレーエフ、ゴーリキー、ホイツトマン、エマーソン等の人々である。然しそれ等にも優つて、最も强き急進思想の播布者は、實に近代劇ではないか。

近代劇に對つて、かゝる重要なる位置を與ふる事は、やゝ誇張に失するとの譏があるかも知れぬ。然し、大方の國に於ける近代思想の發達を研究する時は、他の形式をとれる時は概ね顧みられない事實、大なる社會的事實を、劇のみよく宣傳する事に成功せるを見るのである。

但し、露西亞及び佛蘭西は是が例外である。露西亞國民の智識的生活と、それを壓碎せんと努むる專制政治との兩者間の大なる對照は、必然に國民をして思索せしめ、且つその社會的同情を喚起せしめた。然しトルストイ、チエホフ、ゴーリキー、及びアンドレーエフ等の劇的傑作から、露西亞國民の生活と、努力と、希望と渇仰とを反映しつゝある時すらも、それは他の國に於て劇が成せる程には、急進思想に感化影響する事はなかつた。されど誰か『暗の力』或は『夜の宿』等に依て作られた著しき感化を非認する者があらうか。寔にトルストイは眞の基督教徒ではあつたが、猶且つ組織的基督教の强敵であつた。何人か、人心を殘害する暗の力たる基督教會の迷信を描くに、彼が如き靈腕神筆を有するものぞ何人が、その犧牲に依て犯さるゝ罪惡に對する教會の責任を問ひ而して又、これに依て人類が良心の憤怒を喚起するに、彼が如きドラマチツク、パワーを有するものぞ。その直接にしてまた强力なる効果は、殘酷なる非社會的なる境遇に依て凋萎壓抑せられ、貧窮と罪惡とに追逐せられつゝも、猶必死に希望と渇仰との絕端に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

とり組れる下級民を描いた、ゴーリキーが『夜の宿』に於ても認めらるゝのである。

斷へず自由に對つて努力せる佛蘭西は、實に急進思想の搖籃とも云ふべきで、覺醒の手段として必ずしも劇を選ぶの要なかつたのである。されど猶、裁判官の恐るべき腐敗を描けるブリユーの『赤き衣』の如き、人心を壞滅する富の勢力を寫せるミルボーの『實業は實業だ』の如きは、社會問題に關して佛蘭西で出た書物の何ものよりも、一層廣き範圍に達した事は疑ひないのである。

獨乙、スカンヂナビア、英吉利の如き國に於ては、(更に低度ではあるがまた亞米利加に於てさへも)劇は眞に歷史を作りつゝあるの轍である。

二

譬へば獨乙を見よ、普佛戰爭の勝利に依て、殆んど沸騰點に達せる國民の自負心が生んだ感情的愛國的文學の繁榮は、いかに征服と流血との光榮に依て地方青年の心を殘害したらうか。美人と奢侈とに圍らるゝ貴族富豪が彼等と相並んで獸にも劣れる生活を營める同胞人類あるを信じ得なかつた事は、特に當時の現象であつた。故に獨乙の智識階級は、イブセン、ゾラ、ドーデー、モウパッサン、又は特にドストエフスキー、トルストイ、及びツルゲネフの傑作等の如き、外國文學に依て僅かに渴を醫すに過ぎなかつた。然し乍ら、自己の鄕土に生れた文學及び劇なき文化に、何れの國民かよく久しく耐え得やう。獨乙もまた、漸くにしてその國民の生活と、努力とを反映せる劇を發達せしむるに至つた。

同時代の最も若き劇作家アルノ、ホルツが作『ゼリツケ一家』は、屑箱から摑み出した物を食つて、僅かに生命を繫いで居る社會の落伍者を描いたものである。此の劇が驚くべき憤怒を湧起せしめたのは云ふを要さない。伯林の上流社會が此事實と當面した時、彼等は實にそれを憎んだのである。ホルツが此の作は、前人未發といふべきものではなかつたが、ホルツが劇的天才は、その劇の强き解釋と共に、必然に最も廣き範圍に侵入し、人民をしてその周圍の恐るべき不平等を思索せしめたのである。

更に重要な問題をとり扱つたものは、ズーデルマンの『名譽』、及び『故鄕』である。既に述べた如く感情的愛國主義は獨乙人をして全然誤つた名譽の觀念を抱かしめた結果、決鬪は殆んど日常の出來事となるに至つた。此の狂想に反抗して屢々大なる叫びは揚げられたとは云へ、然も此の國家的疾

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

病の曝露者、淨化者として、未だ何ものも『名譽』の如き力を齎らしたものはなかつた。此の劇は單に決闘を論じた許りでなく、亦實に名譽の眞意義を分拆して、その固定した天賦の感情ではなくして、凡ての人民、凡ての時代と共に變化し、且つ特に人の經濟的、及び社會的狀態に關係するものなる事を示したものである。吾人は此の劇に依て、大厦高樓に棲む貴族富豪が、必然にその犧牲とは異なれる名譽の定義を有する事を知る事が出來る

『名譽』のハイネッケ一家は、その子ロベルトの不在中、富豪ミユーリンクの慈悲でその構内の破れ小舍に住んで居るロベルトはミユーリンクの支配人として、印度で主人の爲に財産を作つて居たが、歸國するに及んでその妹が主人の息に弄ばれたのを知り且つミユーリンクが四萬マルクの金を以て事を葬らんするを見て痛憤措ず、遂に倨傲の故を以て職を失ふや、

『吾々は汝の奴隸であつた、吾々は汝の爲に心血を犧牲とした。然も汝は吾々の娘と妹を凌辱し、そして吾々が汝の爲に儲けた金を以て、その不名譽を償はうとする、是れ汝が名譽と稱するものだ。』と面罵する。

『故郷』は、老人と青年との間の軋轢を描いたもので、劇曲的文學の上に永久の重要なる位置を有する。

父の選んだ婿を拒んだ爲めその家を逐はれた、陸軍中佐シユワルツの娘マグダは、十二年の後著名なるシンガアとして故郷に歸るや、一切父母に過去の祕密を語らぬといふ條件で、家を訪ふ事を承諾する。然し父の執拗な質問は、遂にマグダが生涯の悲劇を曝露するに至り、參事官ホン、ケルレルがまだ學生時代に、經濟的及び社會的獨立の爲に戰つて居たマグダの戀人だつた事が解るシユワルツエはケルレルをして、マグダが法律上の夫たる事を承諾させやうとしたが、既にマグダの成功を見たケルレルは、もしマグダにして舞臺を去り、且つ自分の生せた一子を孤兒院に入れる事を承諾すれば、喜こんでその要求に應ずると云ふ。新舊間の軋轢は、マグダが此の言に於て、殆んどその高潮に達する。

『私は貴君や、貴君方の尊敬すべき社會に就て、自分の思つて居る事を申します。虚僞に依て貴君方の間に自分の生存を延さればならぬ程、如何して私は貴君方より惡いのでせうか。私の躰に附て居る此の黄金、私の名を圍繞する光は、何故私の不名譽を増すのみなのでせうか。十年の永い間、私は朝は早くから夜は遲く迄働かなかつたか。私の多くの仲間のやうに私は一歩一歩私の位置を築き上げなかつたか。何の爲に私は他人の前に羞ぢればならないのか。私は私自身です、そして私自身で、私は現在の自分となつたのです。』

『故郷』の主旨は決して獨創のものではない。それは曾て時代の覺醒を描いた『父と子』とに於て、靈腕を以て描寫された處である。然し技巧に於てはツルゲネフの作に劣つて居るが『故郷』……性の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

覺醒を描ける……は、猶主としてその劇的表現の爲に、强大な革命的要素たる事を示せるものである。

啻に急進主義を播布したのみに止まらず、眞に獨乙思想界を革命した劇作家は、ゲルハルト、ハウプトマンである。彼が第一の作たる『日出前』は獨乙の有ゆる大劇場に依て拒まれ、最後に獨立レッシング劇場で上場されたが恰かも電光の如く社會の全地平線上を照した。此の劇の扱つた處は、無智無學で殘忍な大地主、及びその經濟的奴隷の生活に在て、飲酒の如き、痴愚の如き、また墮落の如き、富がそれを作つた犧牲と、その所有者とに及ぼす感化は、極めて鮮明な色彩で示されて居る。然し『日出前』の最も著しい特徴で、ハウプトマンが譏誣の驟雨を蒙むつた點は養育不能なる親の無差別なる出產に關する問題であつた。その第二回興行の際、一人の著名なる外科醫は、もし出產が舞臺の上で公然論議さるゝならば、獨乙の禮儀と道德とは破れ去るであらうと聲を限りに絕叫した。されど見よ、此の外科醫は忘れ去られたけれ共、ハウプトマンは世界の前に巨人の如く立つて居るではないか。

『織工』が初めて演ぜられた時、道學先生は叫んで云つた。『何事ぞ、勞働者の如き汚穢なる奴隷が、舞臺に上せらるゝとは、凡てその恐怖と醜惡との儘なる貧窮が、恰かも食後の娛樂の如く突出さらるゝとは。こは餘りに堪え難し。』と。然り、職工と當面せん事は、肥滿せる富者に對つては餘りに堪え難い處であらう。自己飽足の社會の聾せる耳に、雷鳴の如く轟ける眞理と事實との故に、こは餘りに堪え難き處であつた。けれども近代劇の目的は抑壓せらるゝものゝ自覺を促がすに在る。尠くともゲルハルト、ハウプトマンが、シレシアに於ける職工の境遇を、世界に對つて描出した所以は、實にこゝに在つて存する。一日十八時間の勞働に從つて、猶且つ充分なるパンと薪炭とを儲くる能はざる人類！半ば雪を以て覆はれた破れ傾ける小舍に住し、寒さを凌ぐものとては、襤褸以外何ものも無き人類！。飢餓と放棄との爲に、痴な以て覆はれた幼兒と、肺結核の末期にある姙婦 。生命なく、希望なく、暖氣なく、惠深き基督敎時世の犧牲よ！。あゝ然り、こは餘りに堪へ難き處ではないか。

經濟狀態の惱ましい力を寫した外、彼はまた、習慣と傳說との束縛を脫せんとする、個人の內的及び精神努力をも扱つた。斯くして、劇的散文詩『沈鐘』に於ける鑄鐘師ハインリッヒは、ラウテンデラインの云つた如く、余りに長く谷底に住んだ爲めに、遂に自由の山巓に達する事が出來なかつ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

た。是と等しく博士フォッケラート及びマアルも彼等に神聖なる傳說を破るの勇氣が無かつた爲に寂しき人々として終つた。然し乍ら、彼等がその失敗こそ、實に永遠に個人的及び社會的解放を妨ぐる世界に對して、反抗的精神を呼び現すものではないか。

マックス、ハルベが『青年』、及びウェデキンドが『春の目ざめ』は、共に全く異なれる方面に向つて急進思想を播布せる劇で、兩者共に少年及び性慾の覺醒と當面する度し難き無智と、狹隘なる嚴格主義とを批評したものである。特に『春の目ざめ』は、眞に善良なる母が十四歲に達した娘をして、兩性間の問題に關して全然知らしめず、そして最後に若き娘が無智の犧牲となつた時、同じ母はその娘が庸醫の手術に依て殺さるゝを見る事を示せるもので、早熟にして怜悧なるウェンドラは母に切願して生の神祕を說明せしめやうとする。

『姉さんがお嫁に行つて二年半になる間に、私はもう今度で三度叔母さんになるのネ。如何してそうなるの。私には如何しても解らないワ。怒つちや厭よ母さん、だつて、それじや誰に聞けばいゝの。叱らないで聞かして頂戴よ。ネ如何してそうなるの。ヨ私もう十四よ、鸛の話なんか信じやしないワ。』若し彼女の母にして、誤まつた道德觀の犧牲でなかつたならば、賢明なる說明はその娘を救つたのだつた。然るに因習的なる母は、羞ぢて說明を與へなかつた。

『子供をもつにはネ、自分が結婚した夫を愛さなければならないのです。夫を愛するといふ事は、お前の年ではまだ解らないが今に解ります。』ウエンドラがどれ程知つて居たかゞ解つたのは、餘りに遲かつた。姙んだ少女は水腫病に罹つたと想像して居たが

『お前は水腫病に罹つたのじやない、子供を姙んだのに違ひない。』と、母が絕望的に叫ぶ時、苦惱せるウエンドラは驚き迷ひつゝ叫ぶ。

『だつて母さん、そんな事があるものですか。私はまだ結婚しやしないじやありませんか。あゝ母さん、何故母さんは、何も彼も話して吳れなかつたんです。』

數年間獨乙に於ける男女思想家は、性慾啓蒙の急務を論じ、兩性問題研究の爲に發刊せる『ムッテル、シユーッ』は、久しい間之が宣傳に努めた。然し乍ら、獨乙國內の多くの學校內に、兩性心理學の課目を强ゆる迄に、急進思想を感化したものは實にウエデキンドが劇的天才の力だつたのである。

（次號完結）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

賣文雜話

澁　六

■賣文社は先づ以て可也の繁昌と御報告申上げて置く。專賣特許大和籌、肺病新案ツヨナール、にきび根治藥エンジエル、ペンキ洗落し新發明ツクセイ液の廣告文案などは最も似合の御注文であつた。

■所が不似合なのは奉悼文の御用命であつた。然し幾ら不似合でも御用命とあれば勿論之に應ずる。賣文社は兎に角先月以來十通ばかりの奉悼文を起草した。

■翻譯物は獨逸文が最も多い。今に猫が獨逸語で鳴く樣になるだらうと誰やらが皮肉を云つたが、獨逸語流行の勢ひは何しろ大したものである。

■獨逸語で思ひだしたが、或時電車の救助網か何かに關する獨逸文の反譯の注文が來た。そして原文一字二錢以上の報酬をやるから念入に反譯せよと云ふ事であつた。そこで仰せの通り念入に仕上げて社員が持參すると、取次の人が、代金は幾ら欲しいかと云はれる。一字二錢以上と云ふ御沙汰であるが、以上には及びませぬから二錢宛の割で戴きたいと云ふと、只今主人は不在だが、何でも一字三錢宛の割で拂へと云はれて居るから、マアそれにして置いて吳れとの事。此方は二錢でいゝと云ふのを、先方で三錢に負けろとは、隨分妙な談判だけれど、幾ら餘計貰つても損は行かぬ道理だから、社員は仰せ通り頂戴して來た。

■それかと思ふと、或時一人のお婆さんが來て、何やらの手紙を書いて吳れと云ふので、社員を捉へて樣々のよまい言を並べて閒をとらせて、扨いよ／＼出來上つた處で、お禮はと聞くから、一枚分五十錢だと云ふと、お婆さんはヒタ呆れに呆れた顏で、私はそんな大枚のお錢を拂ふつもりで賴みに來たのぢや無いと、色々言譯やら謝言やらした後、結局十錢銀貨一つ置いて歸つて行つた。

■桃中軒雲右衛門に金の無心をいふ手紙を一つ大いに名文で書いて吳れと云ふ浪人の來た事がある。何でも十何年前、雲右衛門が豐前小倉に興行に來た時、其の先生は紫川の鯉を取つて雲に贈つた事がある。先生は實にそれ程の古いヒイキ客で、爾來雲に對し欽慕措く能はざる者があるので、此頃窮迫の折柄、欽慕の餘り遂に此の無心を云ふに至つた、と云ふやうな趣意である。賣文社長之を聞いて同情に堪へず、大に腕を揮つて名文を書いた。すると先生大喜びで何れ成功したら大いにお禮をすると云つて歸つて行つたが、それぎり何の音沙汰も無い。蓋し不成功に終つたものと見える。然しそれが不成功に終つたからとて、必ずしも賣文社の名文さ加減が不足であつたといふ譯では無いと信じて居る。

■ツイ先日一つ非常に嬉しい注文が來た。左に注文書の全文を載せる。

拜啓、陳者名前一個左記の條件にて至急御製作の上、速達便にて御送付被成下度
此段代金同封御依賴申上候
一、郵稅共金壹圓のもの
一、母の名イシノに因めるもの
一、子は男なれど名は男らしくなくて
もよろし

何しろ是は賣文社創業以來の珍事である。社長大いに面白がつて、沈吟すること半時ばかり、漸くにして左の二種の案を拵へた

一字名ならば　碧(へき)。默(もく)。閃(せん)。
二字名ならば　野火(のび)。眞玉(またま)。荒砥(あらと)。

此中でも『野火』といふのが一番珍らしくて善からうと書添へて、早速之を先方に送つた。翌日になつて、何だか頻りに其事が

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

思ひ出されるので、あの中いづれを御採用に相成つたか、心得の爲め承つて置きたいと云ふ葉書を出した。すると直ぐ返事が來て、野火を頂戴して早速今朝屆出を濟ませた、數年の後、必ず野火を連れて拜面に罷出る、とあつた。そして猶其の終の添書に、『野火の母は野火を生みし翌日死去致候、行年廿一歲』といふ悲しい消息が傳へられた

■僕が日本蓄音器商會に雇はれたと聞いてそれでは賣文社は止めたのかと云ふ人がある。何アに止めるものか。賣文社あつての蓄音器商會である。僕が蓄音器商會の書記たるは、卽ち賣文社の出仕事である。況んや賣文社には、よし僕が居なくとも、他に濟々たる多士が控へて居るのだもの。

發刊事情

榮

一昨年の暮、監獄を放免になる前、斯な事を思つた。例の大逆事件以來世間は定めて物騷に違いない。とても今迄のやうな無茶ばかりもやつてゐれまい。止むを得ずんば文藝雜誌でも出して見やうか。然し出て見たら世間は獄中で思つてゐたよりも案外に物騷であつた。手も足も出やしない。ぐづ／＼してゐる中に一年を過ぎ、將に二年にもなん／＼とする。何にかしら社會的に動いてゐれば止まぬ僕の本能は、さう／＼は默つてゐられぬ。

七月の始め頃だつたか、荒畑に相談してみると、同感だと云ふ。ぢや九月から始めやうと其場できまる。金は僕がサイカクしやうと云ふので、堺に賴んで何處からか借りて貰ふ事にする、死んだオヤヂのお蔭で每年いくらか入る扶助料をアテにして。

八月の始めに百五十圓ばかり金は出來た處が世の中は諒闇だ。お葬式が濟まん中は仕方があるまいとなつて、九月の創刊が十月に延びる。

九月十日を原稿締切日にきめたのだが、其日になつて小原が正直に送つて來たばかり。小劍は新聞社の方が忙しいからと云つてことわつて來る。安成は音沙汰がない。バーナード、ショウの人と超人を書く筈の堺も十四日になつて未だ手をつけてゐない。そん事で柔いものが一つも來ない。十四日の朝伊庭の寢ごみを襲ふて、やつと十六日の朝までと云ふ約束で、脚本か何かを送つて貰ふ事にきめる。荒畑も新聞社の方が忙いので、兎も角も原稿は送つて來たが、其れ以外には殆んど仕事が出來ない。

事務の方は一切堀保子がやる筈なのだが元來の病身の上に本月の始めから風をひいて弱つてゐる。それで僕が廣告取りにまで出掛けにやならぬ。十一日と十二日と二日間、朝から晩まで駈けづり廻つた。それでも此二日で兎も角も印刷代だけは集めて來た。それに實業之世界の野依君が三頁の廣告を前金にくれたので、實は大分使ひこんで困つてゐた前の資金に少々埋合せが出來た。

こんな具合で、計畫は古いが仕上げは大まごつきにまごついて出來た劾號だ。ろくな編輯の出來やう筈がない(九月十六日)

『新佛教』に堺が唯物論の倫理と題するカウツキーの小冊子の翻譯を連載してゐる。すると石川旭山が之れに反對して、多少精神論氣味のカーペンターの道德の批評と云ふのを翻譯して、矢張り同じ雜誌に連載してゐる。どちらも讀んで置いて善いものだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

九月の評論

榮

■ベルグソン論　一體日本の學者(?)殊に文學者は、其の大中小を問はず、總じて活動寫眞の辯士みたやうなものだ。一寸でも何にか新しい學說なり運動なりが西洋に起ると、すぐに立つて、黃色な聲をふり立てゝ、此處に映りましたる繪はとやり出す。つい先年まではプラグマテイスムが盛んに此の黃いない聲色に迎へられてゐた。しかし其れもいつの間にか消えて了つて、こんどはベルグソンのフイルムが映つて出た。そして到處の活動小屋にベルグソンが〳〵と聲をからして辯じ立てゝゐる。

九月の雜誌の中にも、先づ六合雜誌がベルグソン號と銘打つて、大學出のヤソ連が大勢束になつて、嘗つてマダム、ド、スタエルが晩餐を濟ました後で、『我』だの『非我』だのつて事を一寸ひと言で說明して下さいなとフイヒテに尋ねたやうな好奇心に答へてゐる。

けれども僕には一つ理の分らん事があるベルグソンの非主智的な直覺說を說くのも善い。それもベルグソン論中の最も主要なものには違いない。だが、誰れ一人として未だ嘗つてベルグソンの變化とか創造とか云ふやうな、議論を力說したものゝないのは何故か。ベルグソンの哲學中で、最も多く現實の社會に觸れるのは、此の議論をおいて外にない。日本の文學者に社會的興味、寧ろ社會的智識の皆無らしいのは之れでも分る。

處が九月の趣味に山谷閑人と云ふ名で、殊にベルグソンの此の方面を說いてゐる人がある。尤もみだしに『世界の最大危險人物』などゝあるのを見ると、眞面目に書いたものとも思はれないが、そして其の書振りから推すと何れは亞米利加あたりの雜誌から拜借したものとも思はれるが、しかし內容は短い割に一寸しつかりしたものだ。今其一部分を拔書する。

『一時代の不安不定にして變化の極りなきことは誰も認める事實である……人は過去のまゝを現代に應用しなかつたと等しく現代のまゝを未來に傳へやうとは欲しない——世界は時々刻々變化して止まらない。新觀念新計畫、新希望は後から〳〵續々と泉の湧くやうに出て來る……この不安、不定、變化といふとがベルグソンの哲學の根本思想である。そして絕えず新しき生活新しき思想を得んとする欲求がベルグソンにとりての生の根本義である。譬へば吾人の要求が一篇の詩を作らうとする場合に、吾人の要求及努力は、自然が吾人を造つた時の要求及努力に等しい。而して——自然の造つた萬物がその意志に反して不完全なるものであると等しく、吾人の作つた詩も不完全のものである。そこで吾人は更に他の詩を作らうと努力する。それには今迄の不完全のものは皆な捨てなければならない。これまでの傳習は殘らず破つて仕舞はなければならぬ……過去の既成物は過去に於ては有效であつたかも知れないが、現在には無用である、(之れを要するに)眞のベルグソン派は生活の法則よりも、生其物を常に大なるもの貴きものとしてゐる。』

勿論、之れだけの事なら、何も今更に新しい議論として騷ぐには及ばない。しかしベルグソンの此の議論は、兎も角も社會的興味のある人々に取つて、甚だ深い趣味のある事だから、さう云ふ人々に向つて、原文の讀める人には原文について又讀めない人には三田文學の九月號から連載されてゐる廣瀨哲士氏の翻譯にでもついて、殊に此點に注意せられるやうにと、此紹介をする

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

文壇社會問題　本誌の山本が、新しい戯作家の中に云つてゐるやうに、僕等は今日の文學者が創作となく批評となく其のあまりに我執のみ強くして、そして社會的觀念の殆んど皆無なるに驚かざるを得ない。けれども之れも反動の致す處として或は仕方のない事かも知れぬ。しかし反動は永續きしない。やがては正反合の法則に返らればならぬ。既に其の兆候がそろ〳〵現はれかけて來たやうだ。

　九月八日の讀賣新聞に『文壇の社會問題』と題した安部次郎氏の論文が出てゐる。氏は明治末期の文壇を個人的興味の時代と稱し、此の興味の支配の爲に積極的には文壇に眞正の生命と深さとを獲來つたけれども消極的には文壇から社會的興味を減退若くば閑却させ、强いて之れを冷視し輕視し回避せしめ、遂に文壇は社會と乖離し、文壇の人は文壇とさへ背反するの結果を生じてゐると慷慨してゐる。

La question socialeか Les questions socialesかの問題は今玆に說かない。今は後者に讓るとしても、現今は文壇以外の社會問題の外に、文壇其れ自身の社會問題がある。文壇以外の社會問題についてはチヨツト文人諸君には分りかねまいが、しかしせめては文壇其れ自身の社會問題位なら彼等とても目がありさうなものである。安部次郎氏は更に云ふ。

『併し個人的興味の消極的方面には既に社會と個人との矛盾に對する感傷を含んでゐるとすれば、文壇及文壇の人は自己の事業と存在とを主張せんが爲に、多くの戰ふ可き戰を有し、多くの焦慮す可き社會問題を持つてゐなければならぬ筈である。然るに社會と個人との矛盾は文壇の人に戰鬪を敎へずして籠城を敎へた。籠城は畢竟回避である若し回避によつて矛盾を避け通す事が出來るものならそれもよからう。到底避け通す事が出來ないものなら、逃げて廻る者の末路は自滅の外ない。此處に個人的興味の不安がある。』

　此の不安はとうに出なければならぬ不安である。恐くは安部次郎氏と共に、多くの人々が多少抱いてゐる筈の不安である。けれども今日の所謂聰明なる青年は、之れも山本の云つたやうに、色と酒との外に實行本能を有せざる怠惰者である。今引いた明快な文句の作者たる安部次郎氏の如きすら筆を起すや否や『文壇の社會的方面に活動する事は私には出來る事でもなければ從つてしやうと思ふ事でもない……（只）私の……心に宿る不安を披瀝して、私と興味を異にし性格を異にする個性にアッピールするに外ならない。甚だ虫のいゝ注文乍ら、自分の出來ない事を他人からやつて戴きたいのである』と云ふやうな、仰せの如く甚だズウ〳〵しい言葉を書いてゐる。もう一步も二步も或は五十步も百步も進んで、何故自分にそれが出來ないのかを考へて見るが善い。

　それから見ると之れに應じて出た九月九日のやまと新聞に出た『文壇の自衞』と題する水谷竹紫氏の論文などは、議論としては餘り精緻を缺いてもゐるが、まだ中々分つてゐる。そして氏は其の『實行方面の一端緒として眞摯なる文藝雜誌は須らく保證金を納付し、社會問題の時事に關して評論し得る權能を有せざる可らずと提言してゐる。』

　恥づらくば本誌はまだ保證金を出し得ない。

九月の小説

寒

■青鞜　加藤緑の懷疑、結婚の矢先アト或る男と自由結婚をした姉を想ひ出した島子は、急に只だ一度の見合をしたのみで氣心も知れぬ男と夫婦になるのが厭はしく親や世間に背いて好な男と一緒に暮して居る姉が羨ましくなるといふ文切型。今の先迄エンゲーヂ、リングに見惚れて居たのが急に謂ゆる自覺し「何故私、彼の方と結婚しなければならないんでせう」などゝ云ひ出すのも操つたければ、「姉さんなど誰にも人形のやうに扱はれなくて……」なんて云はれると、到所出たナと苦笑せざるを得ない。それからインスピレーションといふ名詞を動詞に使つて居るなどは亂暴過ぎて少々滑稽だ。神近市の手紙の一つ、新らしい女の反抗的な一面の窺はれる作だ。始めてみよし(多分待合だらう)へ男に伴はれて、「多くの準備と形式と社會の認識とを待つて渡るものと許り考へて居た海を、只だ一人の男に導かれて聞も恐怖もなく」飛び越した女も、男が「暴君の態度を示すやうに」なり女に對して「女性に對する因習的な概念を以てする」のを見て新たにBといふ男と結婚する。佳作だ。然し「男性に對して受身に出て居た私迄が男性の奴隷とならぬ爲、性の滿足な發達を遂る爲に、兩性の間に蟠る永遠の爭鬪に與る事」となつたと云ふのは少々怪しい。男子が實際に於て經濟上の權力を握つて居る社會に在つては、Kを捨てBに行くも甲に離れて乙に就くも、女性は男性の奴隷だといふ事にお氣が付かれないぢやア……。

■白樺　繫憲洲の仇浪、温泉場で會つたコケチッシュな子供迄ある女に、一日一日インパアセプチブルに戀に落ちて行くプロセスを描いたもので、狂熱的なやうな、初心な男を蕩してゐるやうな女の性格、いつも醒めて先の事許り考へて居たのが漸々女に心を占められて全く女のものとなつて了ふ男の感情なとが、極めてナチユラルに非常に巧みに寫されて居る。但だ男女の或る關係が全くレフアーされて居ない爲に、後段が何だか物足りぬ心地がされる。平澤仲次の四日三晩の旅、避暑に行たが面白くない、歸つて來て吉原へ行つて女郎買をするといふ筋。女郎屋へ上つて慷慨するのもワザとらしくて滑稽だし、第一女郎が初會の客に「全く親孝行の爲ですよ」なんて云ふものか。志賀直哉のクローデアスの日記、ハムレツトの裏をサイコロヂカルに描いたものとも云へる、クローヂアス王の近代的な性格がビヾツドに現はれて居る、快心の作である。

■三田文學　縦山庭後のカステラ、お終ひの「人間といふ奴は隨分カステラとでも討死する事の出來るものです」といふ一行の文句が云ひたさに、無慮二十二頁の文章がつられてある。邦枝完二の廓の子、廓といふ字をチヤウと讀ませる事程さやうにキザなもの永井荷風の五月闇、不愉快なそして愚劣な作た、高級文學も危ないもんでゴス。

■早稲田文學　相馬泰三の地獄、生活と勞働とに苦しんで、神經衰弱にかゝつた留吉といふ新聞社の給仕の、常にオド〳〵と物怖ぢする心もちが相應に現はれて居る

■中央公論　島崎藤村の岩石の間、五月の空に横はる淺間一帶の大きな傾斜の下に、華やかな都會の生活から逃れて來て、村の子供を教育して居る人々の群れ、殊に自分も妻もすつかり田舎者になつて了つて、その娘は荒い言葉を使つて男のやうに悪戯

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

をする高瀬の一家が、印象的な筆で描かれてある。琢かれた壁のやうな作品だ、殊に飾り物に相應しいと云ふ意味で。志賀直哉の大津順吉、順吉は女中と戀して事實に於て結婚して了ふ、そしてこれを父母の前に發表すると、案の如く反對を受ける。終ひには自分の承諾なしには決して下げぬと約束した女を、祖母や父母が詐はつて下げて了ふ。自分の公明正大な所置に對して、その行爲の空々しさ、その平氣で嘘を吐く賤しさ、順吉は敵の重圍の裡に在つて、その蒙つた無道と不正とを怒る俘虜の如く、憤り且つ鬪へる。藝術品として秀れた作物であるに許りでなく、個人の自由、人格の權威の上に積み重ねられた家庭の邪曲に對して、社會的にも個人的にも今迄睡つて居た青年の間にこういふ作の現はれたのは、甚だ面白い意義ある事だと思ふのである。「千代を愛するやうになつて……雇人が臺所で如何いふ物を食つて居るだらうといふ事を初めて考へて見た、雇人は雇はれて居る間は一度でも自分が毎日入つて居るやうな全く垢の浮てない澄んだ風呂に入る事はないのだといふ事を、初めて思ひ付た」といふ處を讀んでは涙が出た。勿論、安藝者にフラれた愚痴より外書く能のない文士から、異端外道視されるのは承知の上で。長田幹彦の尼僧、處は京都、尼僧が美しい然し色惡の坊主に許されて、貯金を悉皆ハメかせられたといふ筋、此の作の生命は內容に在るのではなくて、技巧に在るのだらう。

■文章世界　上司小劍の野崎村

罪がなくて面白い小說だ。一體此の作者の性格には極めて愛嬌のある、滑稽趣味の多い一面と、人付の惡い、挨拶をしても澄して居るやうな一面とがあるらしい。早稻田文學の松の樹なんていふものは、冷靜ぶつた、哲學者ぶつた、生ッ噛りの人生觀が轉がつて居て甚だキザだが、是はそのスナホな、面白い方面のみが出て居るので讀んで甚だ良い氣持だ。殊に文章世界の讀者達のやうな、若い者にやいゝ小說だ。水野葉舟の薔薇、東西、これが日本の文壇で、若い女の心理を描寫する事に於て、當代その比を見ないと云はるゝ作家の作品かと思ふと、情ないよりや馬鹿々々しくなるほど淺薄だ。田山花袋の暑き日に、老夫婦の心配の原因が、昔し他にやつた息子だといふ處まで讀んで行づたら、終ひ迄のプロットがすつかり解つて了つた。然し書き方は巧い、詰り一種の馴れで書いた小說なんだ。

■太陽　後藤宙外の工場主

此頃の文壇では長田幹彦だの、谷崎潤一郎だの云ふ人を、文壇の成金黨と云ふそうだが、さすれば十年一日の如く一つ事をくり返して、別に大家から大々家にもならぬ宙外氏等は差詰め文壇の成功主義屋、努力奮鬪主義屋とでも云ふべき處だらう。此の作等も印象の薄い、只だダラ〳〵したものに過ぎない是と同じ誌上の、そしてその成金黨の一人の長田幹彦の海邊の町の、そう大した價値のある物ではないが、流石に芳烈な色香のある作に較ぶれば、老大家の末路、誰か一掬の涙無からんやと云ひたくなる。

■次號豫告■

□近代科學の傾向（評論）……	大杉　榮
□近代劇論（評論）……………	荒畑寒村
□犢の徑（詩）…………………	飄　風
□人と超人（研究）……………	堺　利彦
□未定……………………………	上司小劍
□奴隷婦人は近世の產物（評論）	白柳秀湖
□未定……………………………	安成貞雄
□艦底（小說）…………………	荒畑寒村

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

消息

■上司小劍からの手紙の一節に云ふ。僕此頃時計道樂を始め、段々に機械の上等々々と進んで來て、昨日は到頭ローヤルと云ふ試驗室に採用される機械（ローヤルからが試驗室に入るのだ）を白金側から取出さして、同じ型の銀側に入れさせた、一寸五十圓ばかりかゝつただけに時間の正確、內部精緻驚くべしだ。昨今其時計ばかり眺めて暮してゐる。（九月七日）

■サンデーを退いた白柳秀湖は、しきりにブツクメーキングに耽つてゐる。旣に『親分子分』のトリロジーなる『英雄篇』と『俠客篇』とを出し、今又其最後の『浪人篇』を執筆中。

■伊藤の證信は信者の女共にやたらに無我愛を實行して、朝子尼にさんざんやり込められ、遂に雜誌をよして、今はドクトル加藤の實費診療所淺草支部に雇はれてソロバンをはぢいてゐる。

■もと社會主義者西川光次郎は、松村介石の道の會に入り、あちこちで資本家の御爲めになるやうな道話を、熱心に勞働者に演說して聞かして居る。

■安成貞雄、二郎の兄弟は牛込市ケ谷仲の町三八に轉宅した。貞雄は近々某書店より『金髮美人』といふ小說を出す。

■聘ぜられて白河鯉洋と共に大坂日報に赴いた山口孤劍、書を東京の友に飛ばして曰く、「浪華の地、吾等江戸つ子の住むべき處ならず」と。江戸つ子のつもりで居るところが大メンヱカツタ。

■三河村の聖者木下尙江は、岡田某の門に入つて萬能剤腹式呼吸の秘法を傳授され、此頃では自宅や門人の家で大に無免許醫を興行して居るゲナ。

■賣文社常任書記岡野辰之介は、今度四谷新聞の主筆、編輯長、記者、廣告係に兼任された。

■久しく朝鮮に行つて居た細井吼崕は日本新聞に入つた。

■大杉榮は或るお役人の委囑を受けて、九月から法華經の新譯に取掛つて居る。ジユール、モール氏がサンスクリツトの寫本四冊を參照して佛文に逐字譯を施した、その重譯ださうだ。

注意

■實價一冊金拾錢、半年分前金五拾五錢、一年分前金壹圓。但し海外よりの御注文は別に金二錢宛の郵稅を申受く。

■每年數回擴大號を發刊す、其の場合には其の定價に應じて前金より差引す。

■郵劵代用は五厘切手に限り、一割增の事。廣告料特別一頁拾五圓、普通拾圓。

■原稿〆切期日は每月十日。

大正元年九月廿八日印刷
大正元年十月一日發行

編輯兼發行人　東京府豐多摩郡大久保村大字大久保百人町三百五十二番地　近代思想社內　大杉榮

印刷人　東京市赤阪區福吉町一番地古河原方　荒畑勝三

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

萬人必讀の大寶典

農學博士 法學博士 新渡戸稻造先生著

世渡りの道

◎定價壹圓七拾錢 ◎郵稅內地拾貳錢 ◎滿韓樺臺小包料四十錢

新渡戸先生苦心の名著『修養』一度世に出づるや好評嘖々、期年にして版を重ぬること二十有餘回、洛陽の紙價爲に高し。先生今や米國大學講演の大業を卒へて歸朝せらるゝに及び玆に其姉妹篇たる『世渡りの道』を公にせらる共に修養を說けりと雖も彼は自己に對する修養に重きを置き、是は他人に對する關係義務を說き彼は內を主とし此は外を主とす。姉妹篇にして異體同心たるものなり。故に『修養』を讀める人は又必らず本書を讀まざるべからず。

先生の學識德行は一代の師表として仰ぐ所、本書は先生四十年間の研究と實踐とより得來れる大教訓にして透明なる常識を緯とし該博なる智識を經とし以て處世上の實際問題を解決せる最新の修養書也

發行所 東京市日本橋區南紺屋町十二 實業之日本社 郵便振替貯金口座東京三二六番

第三回

新學期開講

◉切實なる時代の要求に依りて生れたる最も實際的なる漢學講義錄！（此際入會者には特典あり）

普通漢學講義

講義　毎月二回發行

會費　一ヶ月　四十錢　一ヶ年（全部四圓四十錢）

講師　博士、學士、其他數名

會期　一ヶ年

漢學は東洋思想の源泉にして東亞文明の根本たり其教訓の深遠なる其興味の無限なる一朝にして之を悟るべからず然るのみならず漢文學は日本文學の一支源にして其感化の及ぶ所至大至深なり苟くも漢學の智識を缺きては遂に文を解する能はず。思想に志あるものと文章に志あるものと凡て必ず之を學ばざるべからず（附かも世に漢文學を平易に講述せるもの甚少し、本會夙に『漢學講義』を發刊して其平易なる講義と懇切なる指導により、大に斯界の歡迎を博し既に學期を重ねて基礎益々固く信用益々深きを加ふるに至れり、今や第三新學期を開講し大に特典を設けて會員を募集す。江湖斯學に志あるの士、速に來て入會せられよ。講義錄『見本付會則』申込次第無代進呈す

◉漢學獨習に缺くる可らざる講義錄として好評嘖々たり

東京小石川大塚上町十三　振替（東）一二一九四番　漢學普及會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新古書籍取次販賣

勉強迅速取次

地方販賣書籍

地方讀書家諸君の御便利を計り新古書籍雜誌類は何等の種類を問はず多少に係らず勉強取次仕り候

新本割引

新本は總て定價通りにて郵送料は弊店の負擔と致し候、但し原書及辭書は割引致さず候

古本販賣

古本は價格の不同有之候間一應御照會の上御注文被下度御照會の節は往復端書又は返信用郵券封入にて願上候

御注文便法

御注文の節は著者、書名、定價、發行所の御記入を願上候
御送金の節は振替口座にて規定の登記料貳錢増にて東京壹七壹七壹番東條書店宛に御拂込被下候はゞ途中盜難、紛失等の恐れ無く至極便利に御座候

東京市神田區南神保町拾五番地
東條書店
振替口座東京壹七壹七壹番

▲▲堺利彦先生著▼▼

天下太平

四六版 百廿六頁 定價二十五錢 郵税四錢

目次…お玉杓子の記（踏六）…故郷の七日（堺利彦）…靴（賣文社技手故田島梅子）…チョイトネ節（唖蟬坊）…發行者より（發行者）

若山牧水君著＝眞の藝術觀

牧水歌話

四六版三百四十頁金文字入美裝定價八十五錢郵税八錢

中央公論…現今歌壇の混沌として振はざる間にあつて最も特色を失はず尚ほ近代青年の心持を表はし同感せしむるものは何といつても若山君である君が持つて居る色濃い寂寥は此頃少しくその周圍の寂寥と同色相失ひ初めたやうであるが君一人として見れば興味は昔に變らない、牧水君も追々變つて行くのであらう、それが只管待たれる、此書はさうした行樣にある君の周圍に向けられた靜かな注意の表白である、柴舟、晶子、夕暮諸氏の歌及若山君自身の歌の評釋、時折の感想斷片等がある。

東京市小石川區大塚町二十五番地
文華堂書房 振替口座東京七參五五番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

（最新刊）

入蜀記詳解

（宋）陸放翁著　寺崎廣業書伯書
笹川臨風先生序　吉川靈泉書伯書
原穗村先生註　池上文僊書伯装幀

▲口繪コロタイプ版一葉入▲三六版上製クロース金文字入頗る美本

定價六十五錢
郵税六錢

東京小石川大塚上町十三
城北出版社
熊谷千代三郎

賣文社

▲營業種目▲新聞雜誌書籍の原稿製作▲英佛獨語の翻譯▲和文の英佛獨譯▲演説講義談話の筆記▲趣意書意見書廣告文書簡文其他一切文章の立案代作及添削

▲近地御一報次第參上

堺利彦
四谷區左門町十三

英語獨逸語教授

四ッ谷區寺町二十一
天王横丁坂上

主幹　高畠素之
主任教師　小原愼三

實用新案特許
ピラミツト

たきつけ

ピラミツトはマッチ一本にて直ちに燃えつき、如何なる堅き薪炭又は石炭にても、たつた一個にてたきつけ得る事請合也。又ピラミツトは在來品と違ひ、其烟無臭にして清淨なる故、上等の御座敷又は臺所にて御使用なさるとも決して汚れる憂なし。市内の御注文は御一報次第多少に係らず直ちに持參す。

定價　百個入　金拾錢

製造元　府下巣鴨村庚申塚四〇五　眞田商店

▲市内一手販賣　府下代々木字山谷一二三　林商店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

■本雜誌の讀者に限り定價の二割引にて撮影可仕候
■遠近に係らず出張撮影の依賴に應ず

寫眞師 千賀俊月

東京市小石川區安藤坂下
吉見寫眞館

日本醫事週報（毎週土曜）

一年前金二圓

見本を望まるゝ諸君は端書にて御申込次第進呈可仕候

京橋南佐柄木町五
日本醫事週報社

英文學教授

日用の英語、英文學及び政治、法律、經濟、哲學、社會學、宗教ニ關スル英文名著ノ譯讀
講義個人教授、

東京市四谷區南伊賀町四十一番地
山田嘉吉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

月刊雜誌

人物

第四號

九月十五日發行

一部金五錢
十二部前金五十五錢
廿四部前金一圓（郵税共）

本誌に對する新聞評

政治家の月旦もあれば實業家の評判もある宗教家の惡口も出れば學者の皮肉も載せてある小雜誌であるが材料豐富で活氣横溢體裁亦佳、其れで僅々一部五錢十二部五十五錢とは安いものである（中央新聞評）　古今の人物を縱横無盡に評論し爬羅剔抉頗る痛快なる雜誌なり（北陸新聞評）　全紙を通じて十種の特徴ある雜誌なり（扶桑新聞評）　どうやら執筆者は文壇の變り物らし（米澤新聞評）　執筆者諸氏何れも文壇の切れ者讀んで面白き事この上なし（越佐新聞評）

第四號目次

偉人たるの資格（西川光次郎）　日本人（茅原華山）　親鸞上人（三井甲之）　西郷隆盛（伊藤痴遊）　閥閲金閥（伊藤痴遊）　ルーズヴエルト（倉辻白蛇）　甲州人論（結城桂陵）　人物崇拜（向軍次）　新らしき女（記者）　田岡嶺雲（堺利彦）　青機百話を讀む（記者）　讀書室　江木衷子（白柳秀湖）　秘密の一節　ホイットマンの少時（石川三四郎）　大阪女を罵る（山口孤劍）　信長論（尾崎宜郷）　妖婦ヘレネ（大杉榮）　天才と狂客（高島米之）　人は一代のみにて全く墮落するものに非ず（記者）　木曾義仲（西川光次郎）　玉石閧架　井上侯の義俠　維新豪傑（山口孤劍）　挽畫猫（ニコニコ反對）（獨身反對）　廣告

發行所　東京市本郷區湯島三組町二十番地
人物社
振替一二一九〇番
電話下谷四七二四番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

野依秀一の四小快著

▲野依叢書第一編

快氣焰

▲定價廿錢　▲郵税二錢

著者は年が年中氣焰を以て鳴れる青年也本書は卽ち著者が其一流の氣焰を諸名士と交換せるもの也

四版出來

▲野依叢書第三編

野依式處世法

▲定價三十錢　▲郵税四錢

著者が社會に起て活動を始むるや世人彼の行動の異なるを稱して野依式と言ふ本書は野依式の神髓を語れる著也

參版出來

▲野依叢書第二編

傍若無人論

▲定價廿錢　▲郵税二錢

無學の著者が大膽に或は先輩を罵倒し或は青年處世の道を吐露したる快著也

五版出來

▲野依叢書第四編

短刀直入錄

▲定價廿五錢　▲郵税二錢

本書は著者が何人に對しても苟も下らず所謂短刀直入に切りこめる言議集にして天下一品の快著也

四版出來

發行所　東京芝露月町　實業之世界社　振替貯金口座三四三三三番

天下無二の快著

▲不撓不屈の青年快男兒！

野依秀一著

無學の聲

定價一圓二十錢　郵税八錢

四六版上製七百七十頁

▲本書一度出づるや

日本全國の大新聞雜誌悉く筆を揃へて激賞せざるはなし。以て本書の價値をトするに足る。宜哉、今や七版を出す。

著者は百難を排して奮闘努力する現代の代表的青年也

▲發行所

東京市芝區露月町
振替貯金三四三參

實業之世界社

大正元年十月一日第三種郵便物認可
大正元年十月一日發行（毎月一日發行）
（定價壹冊金拾錢）